

## 第2章 保育の内容

本章では、第1章を踏まえ、保育所の「保育の内容」について述べる。保育所において、子どもが自己を十分に発揮し、生活と遊びが豊かに展開される中で乳幼児期にふさわしい経験が積み重ねられるよう、保育の内容を充実させていくことは極めて重要であり、それは保育所の第一義的な役割と責任である。特に保育の専門性を有する保育士は、子どもと共に保育環境を構成しながら、保育所の生活全体を通して保育の目標が達成されるよう努めなければならない。そのためには、子どもの実態とこの章で示す保育の内容とを照らし合わせながら、具体的な保育の計画を作成し、見通しをもって保育することが必要である。

本章では、第1章の4の(1)に示された資質・能力が、保育所における生活や遊びの中で一体的に育まれていくよう、保育の「ねらい」「内容」「内容の取扱い」を、乳児、1歳以上3歳未満児、3歳以上児に分け、各時期における発達の特徴や道筋等を示した「基本的事項」と併せて示している。保育所は、これらを基本に、それぞれの時期の育ちは連続性をもつものであることを意識しながら、第1章の3に示された保育の計画及び評価に関する事項を踏まえ、保育の内容をつくり出していくことが求められる。その際、各々の保育所の理念や方針、地域性などを反映させ、創意工夫の下、保育の内容を構成することが重要である。

この章に示す「ねらい」は、第1章の1の(2)に示された保育の目標をより具体化したものであり、子どもが保育所において、安定した生活を送り、充実した活動ができるように、保育を通じて育みたい資質・能力を、子どもの生活する姿から捉えたものである。また、「内容」は、「ねらい」を達成するために、子どもの生活やその状況に応じて保育士等が適切に行う事項と、保育士等が援助して子どもが環境に関わって経験する事項を示したものである。

保育における「養護」とは、子どもの生命の保持及び情緒の安定を図るために保育士等が行う援助や関わりであり、「教育」とは、子どもが健やかに成長し、その活動がより豊かに展開されるための発達の援助である。本章では、保育士等が、「ねらい」及び「内容」を具体的に把握するため、主に教育に関わる側面からの視点を示しているが、実際の保育においては、養護と教育が一体となって展開されることに留意する必要がある。

本章に示される事項は、主に教育に関わる側面からの視点として、各時期の保育が何を意図して行われるかを明確にしたものである。すなわち、子どもが生活を通して発達していく姿を踏まえ、保育所保育において育みたい資質・能力を子どもの生活する姿から捉えたものを「ねらい」とし、それを達成するために保育士等が子どもの発達の実情を踏まえながら援助し、子どもが自ら環境に関わり身に付けていくことが望まれるものを「内容」としたものである。また、乳幼児期の発達を踏まえた保育を行うに当たって留意すべき事項を、「内容の取扱い」として示している。

ただし、保育所保育において、養護と教育は切り離せるものではないことに留意する必要がある。子どもは、保育士等によりその生命の保持

と情緒の安定が図られ、安心感や信頼感の得られる生活の中で、身近な環境への興味や関心を高め、その活動を広げていく。保育の目標に掲げる「望ましい未来をつくり出す力の基礎」は、子どもと環境の豊かな相互作用を通じて培われるものである。乳幼児期の教育においては、こうした視点を持ちながら、保育士等が一方的に働きかけるのではなく、子どもの意欲や主体性に基づく自発的な活動としての生活と遊びを通して、様々な学びが積み重ねられていくことが重要である。

したがって、第1章の2の(2)に示された養護に関わるねらい及び内容と、本章に示す教育に関わるねらい及び内容は、日々の保育における子どもの生活や遊びの中で、相互に関連をもち、重なりながら一体的に展開されていくものとして捉える必要がある。

発達過程の最も初期に当たる乳児期には、養護の側面が特に重要であり、養護と教育の一体性をより強く意識して保育が行われることが求められる。その上で、この時期の教育に関わる側面については、発達が未分化な状況であるため、生活や遊びが充実することを通して子どもたちの身体的・社会的・精神的発達の基盤を培うという考え方にに基づき、ねらい及び内容を「健やかに伸び伸びと育つ」「身近な人と気持ちを通じ合う」「身近なものに関わり感性が育つ」の三つの視点からまとめている。保育に当たっては、これらの育ちはその後の「健康・人間関係・環境・言葉・表現」からなる保育のねらい及び内容における育ちにつながっていくものであることを意識することが重要である。

1歳以上3歳未満児の時期においては、短期間のうちに著しい発達が見られることや発達の個人差が大きいことを踏まえ、一人一人の子どもに応じた発達の援助が適時、適切に行われることが求められる。その際、保育のねらい及び内容を子どもの発達の側面からまとめて編成した「健康・人間関係・環境・言葉・表現」の五つの領域に関わる学びは、子どもの生活や遊びの中で、互いに大きく重なり合い、相互に関連をもちな

がら育まれていくものであることに留意が必要である。

3歳以上児の保育は、こうした乳児から2歳にかけての育ちの積み重ねが土台となって展開される。子どもの実態を踏まえ、発達を援助することを意図した主体的な遊びを中心とする活動の時間を設定したり、環境の構成について検討したりするなど、五つの領域のねらいと内容をより意識的に保育の計画等において位置付け、実施することが重要である。特に、小学校就学に向かう時期には、保育所における育ちがその後の学びや生活へとつながっていくという見通しをもって、子どもの主体的で協同的な活動の充実を図っていくことが求められる。

また、第1章の4の(2)に示した「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が、ねらい及び内容に基づく保育活動全体を通して資質・能力が育まれている子どもの卒園を迎える年度の後半における具体的な姿であることを踏まえ、指導を行う際には考慮することが必要である。

# 1 乳児保育に関わるねらい及び内容

## (1) 基本的事項

- ア 乳児期の発達については、視覚、聴覚などの感覚や、座る、はう、歩くなどの運動機能が著しく発達し、特定の大人との応答的な関わりを通じて、情緒的な絆<sup>きずな</sup>が形成されるといった特徴がある。これらの発達の特徴を踏まえて、乳児保育は、愛情豊かに、応答的に行われることが特に必要である。
- イ 本項においては、この時期の発達の特徴を踏まえ、乳児保育の「ねらい」及び「内容」については、身体的発達に関する視点「健やかに伸び伸びと育つ」、社会的発達に関する視点「身近な人と気持ちが通じ合う」及び精神的発達に関する視点「身近なものに関わり感性が育つ」としてまとめ、示している。
- ウ 本項の各視点において示す保育の内容は、第1章の2に示された養護における「生命の保持」及び「情緒の安定」に関わる保育の内容と、一体となって展開されるものであることに留意が必要である。

乳児期は、心身両面において、短期間に著しい発育・発達が見られる時期である。生後早い時期から、子どもは周囲の人やものをじっと見つめたり、声や音がする方に顔を向けたりするなど、感覚を通して外界を認知し始める。生後4か月頃には首がすわり、その後寝返りがうてるようになり、さらに座る、はう、つたい歩きをするなど自分の意思で体を動かし、移動したり自由に手が使えるようになっていっていき、身近なものに興味をもって関わり、探索活動が活発になる。生活においても、離乳が開始され、徐々に形や固さのある食べ物を摂取するようになり、幼児食へと移行していく。

人との関わりの面では、表情や体の動き、泣き、喃語<sup>なん</sup>などで自分の欲

求を表現し、これに応答的に関わる特定の大人との間に情緒的な<sup>きずな</sup>絆が形成されるとともに、人に対する基本的信頼感を育てていく。また、6か月頃には身近な人の顔が分かり、あやしてもらおうと喜ぶなど、愛情を込めて受容的に関わる大人とのやり取りを楽しむ中で、愛着関係が強まる。その一方で、見知らぬ相手に対しては、人見知りをするようになる。

言葉の発達に関しては、9か月頃になると、身近な大人に自分の意思や欲求を指差しや身振りで伝えようとするなど、言葉によるコミュニケーションの芽生えが見られるようになる。自分の気持ちを汲み取って、それを言葉にして返してもらおう応答的な関わりの中で、子どもは徐々に大人から自分に向けられた気持ちや簡単な言葉が分かるようになる。

このように、乳児期は、主体として受け止められ、その欲求が受容される経験を積み重ねることによって育まれる特定の大人との信頼関係を基盤に、世界を広げ言葉を獲得し始める時期であり、保育においても愛情に満ちた応答的な関わりが大切である。

またこの時期は、心身の様々な機能が未熟であると同時に、発達の諸側面が互いに密接な関連をもち、未分化な状態である。そのため、安全が保障され、安心して過ごせるよう十分に配慮された環境の下で、乳児が自らの生きようとする力を発揮できるよう、生活や遊びの充実が図られる必要がある。その中で、身体的・社会的・精神的発達の基盤が培われていく。

こうした乳児の育つ姿を尊重する時、その保育の内容として「健やかに伸び伸びと育つ」「身近な人と気持ちが通じ合う」「身近なものに関わり感性が育つ」という視点が導き出される。乳児の保育は、これらの視点とともに、養護及び教育の一体性を特に強く意識して行われることが重要である。

## (2) ねらい及び内容

### ア 身体的発達に関する視点「健やかに伸び伸びと育つ」

健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力の基盤を培う。

#### (ア)ねらい

- ① 身体感覚が育ち、快適な環境に心地よさを感じる。
- ② 伸び伸びと体を動かし、はう、歩くなどの運動をしようとする。
- ③ 食事、睡眠等の生活のリズムの感覚が芽生える。

人が健康で安全な生活を営んでいくための基盤は、まず環境に働きかけることで変化をもたらす主体的な存在としての自分という感覚を育むことからつくられる。自ら感じ、考え、表現し、心地よい生活を追求していく健やかな自己の土台は、安全に守られ、保育士等による愛情のこもった応答的な関わりによって心身共に満たされる、穏やかで安定した生活を通じて築かれる。

この時期の子どもは最初、自身と外界の区別についての意識が混沌としている状態の中で、身近な環境との関わりを通して身体感覚を得ていく。例えば、機嫌よく目覚めている時、自らの手をかざして眺めたりして手を発見する。その手で周囲を探索して、人やものの感触の違いを感覚的に理解する。さらに、抱き上げて優しく言葉をかけられたり、清潔で肌触りのよい寝具や衣類に触れたりした時に、心身両面の快適さを感じ、満足感を得る。身体の諸感覚が育つ中で、子どもが自分の働きかけを通して心地よい環境を味わう経験を重ねることが重要である。

こうした生活の中で、周りの人やものに触ってみたい、関わってみたいという気持ちが膨らみ、子どもは対象に向かって盛んに自分の体を動かそうとする。保育士等に気付いて手足をばたつかせたり、興味を引か

れたものをつかもうと懸命に体を起こそうとしたりして、体を動かすことを楽しみながら、保育士等の温かいまなざしや身体の発育に支えられ、次第に行動範囲を広げていく。安心して伸び伸びと動ける環境は、探索への意欲を高め、心身の両面を十分に働かせる生活をつくり出す。

また、この時期の生理的な欲求が、保育士等による愛情豊かな応答とともにほどよく満たされる生活は、子どもに安心感と充足感をもたらす。眠い時に寝て、空腹の時にミルクを飲ませてもらう。空腹が満たされて周囲に働きかければ、それに相手をしてもらう。日常生活におけるこの心地よい繰り返しは、生活のリズムの感覚を培うのである。

## (イ) 内容

- |   |
|---|
| <p>① 保育士等の愛情豊かな受容の下で、生理的・心理的欲求を満たし、心地よく生活をする。</p> |
|---|

この時期の初めの頃、子どもの欲求は、そのほとんどが生きていくための基本的な欲求、すなわち生理的欲求である。この生理的な欲求が、ほどよく満たされることが第一義的には重要である。しかし、健康で安全な生活をつくり出す力の基盤を培うには、例えば、食欲が満たされるだけでは不十分である。保育士等に不快な状態を空腹と汲み取ってもらい、子ども自身のペースがほどよく尊重されながらタイミングよく温かい言葉とともに食べさせたり飲ませたりしてもらって、お腹が満たされ心地よくなっていく経験を重ねることで、人や周囲に対する信頼感が育つ。こうした保育士等の関わりのあり方は、食事だけではなく、他の生理的な欲求に対しても同様である。保育士等には、子どもを独立した人格をもつ存在として受け止め、子どもに対して信頼と思いやりをもって応答することが要求される。こうした関わりの延長線上に、子どもの人と関わりたい、認めてほしいといった心理的欲求が育つ。



**② 一人一人の発育に応じて、はう、立つ、歩くなど、十分に体を動かす。**

この時期の子どもの発達は、個人差が大きい。そして、心身の発達は未分化な状態で互いに影響し合いながら発達していく。例えば、座ることが可能になった子どもは、周囲に注意や興味を引かれるものや遊具があれば、それに触発されて手を伸ばし、引いたり、転がしたり、なめたりして遊び出す。その注意や興味の対象となるものが、手を伸ばしても届かないところにある時、手に入れようと試行錯誤するうちに、はうなどして近づき、それを手に入れるという経験が生じる。それは、自分の体が動く感覚と求めたものが手に入る経験とが、同時に起こるということである。このように保育士等が一人一人の子どもの発達過程を踏まえ、遊びの内容を意図して構成した環境の下、子どもは遊びの中で、はう、立つ、歩くなど体を動かすことの楽しさを経験する。こうした経験を豊かに重ねていくために、十分に体を動かすことのできる空間を確保するとともに、子どもの個人差や興味、関心に沿った保育室の環境を整えることが重要である。

**③ 個人差に応じて授乳を行い、離乳を進めていく中で、様々な食品に少しずつ慣れ、食べることを楽しむ。**

この時期の子どもの生活は、それぞれの生理的なリズムに基づいて営まれる。個々の子どもの食事に対する欲求を受け入れながら、子どもに合わせてゆったりとした環境の中で授乳を行うなど、生理的な欲求が一人一人に応じて満たされることは、子どもに安心感をもたらす。

離乳の開始は、それぞれの家庭の状況や発育状況を考慮して慎重に取

り組む。その上で、離乳食を提供する際も、子どものペースや食事への向かい方を尊重し、落ち着いた環境の下、保育士等も子どもと一緒に食事を味わうような気持ちで関わるのが大切である。初めて口にする食品を提供する際には、そのおいしさが経験できるよう気持ちを添えた言葉かける。苦手そうな味や食品に関しては、形や食べる順番を変えてみるなど工夫するとともに、食事の時間が子どもにとって楽しいものとなるよう心がけることが重要である。

**④ 一人一人の生活のリズムに応じて、安全な環境の下で十分に午睡をする。**

この時期の子どもの生活は、一人一人の生理的なリズムが尊重され、十分に寝て、よく飲み、食べ、そして目が覚めたらしっかりと遊んで、起きている時間が充実したものとなることが重要である。

午睡の時間には個人差があることから、ゆるやかに隔離され、静かで安心して眠れる場所などが必要になる。睡眠中の安全には、保育士等が細心の注意を払わなくてはならない。

生理的なリズムが尊重され、しっかりと寝て起きた子どもの情緒は安定する。安定した情緒は、子どもの探索活動を活発にする。活発な探索活動は意識をより覚醒させ、目覚めている時間を長くする。よく動き遊んだ子どもは、ほどよい空腹を感じる。これに保育士等が応答的に関わりながら提供される食事の時間は、食事への意欲を高める。楽しい食事の時間を過ごして、お腹が満ち足りてくると、その心地よさは子どもを眠りに誘う。以上のような個別的なリズムに応じた生活を十分に経験した後、子どもたちの目覚めている時間が次第にそろってきて、概ね同じ時間帯に食事や睡眠を取るようになっていく。こうして、保育所における一日の生活の流れが、徐々に出来上がっていく。

⑤ おむつ交換や衣服の着脱などを通じて、清潔になることの心地よさを感じる。

清潔になる心地よさは、経験を通して学習されるものである。おむつが濡れているのを感じている時に、「気持ち悪いね」という気持ちの伴った言葉がけとともにおむつを交換してもらい、その結果、濡れていた時とは異なる乾いてさらさらした感覚を「さっぱりしたね」というやはり気持ちの伴った言葉とともに経験する。この経験が毎日何度も繰り返されることで、清潔に対する心地よさの感覚が育っていく。衣服の着脱や食事時に手や顔を拭いてもらうといった経験も、同様である。

このような人としての根源的な部分に、心を込めて丁寧に対応され心地よさを味わう経験は、他者に自分の存在を肯定的に受容される経験であり、それは子どもが自身の存在を肯定的に受け入れることへとつながる経験でもある。

### (ウ) 内容の取扱い

① 心と体の健康は、相互に密接な関連があるものであることを踏まえ、温かい触れ合いの中で、心と体の発達を促すこと。特に、寝返り、お座り、はいはい、つかまり立ち、伝い歩きなど、発育に応じて、遊びの中で体を動かす機会を十分に確保し、自ら体を動かそうとする意欲が育つようにすること。

子どもの健やかな発達は、喜びや驚きなど様々な思いを共有し、状況に応じて慰めや励ましを与える保育士等からの温かく共感的な関わりをはじめ、身近な人との心の通い合う日々の温かな触れ合いを通じて、心身両面が深く結び付きをもちながら促されていく。

そうした育ちの姿は、例えば次のような日常の保育の場面に見られる。ある子どもが保育士等のそばで輪投げの輪をなめて遊んでいたが、その輪がはずみで手から離れて転がり出す。輪が止まって倒れると、子どもはそれをめがけてはって行き、手に取って今度は床に打ち付けたり、「あーあー」と声をあげながら振り回したりしている。保育士等が「面白いもの見付けたね」と声をかけ、輪に向かって子どもがはって行くのに合わせて「まてまて」と後に続いて、一緒に遊び出す。

また他のある子どもは、低い柵の間から、玩具を柵の中に入れていた。次々と入れて周囲に玩具がなくなると、今度は手を伸ばせば届きそうなところに下がっている鈴をつかもうとするが、なかなか届かない。お尻を浮かせるようにして、何度も試みているうちに柵につかまり立ちをすることができ、鈴に手が届いたので、揺らして音を出している。その様子を見守っていた保育士等が、「立てたの」とか「いい音がするね」と喜んで声をかけると、子どもも嬉しそうに一緒に笑う。

このように、日常の生活や遊びの中で、それぞれの子どもの発達の状態に即して様々に体を動かす機会や環境が確保されるとともに、保育士等の援助に支えられて、自ずと体を動かそうとする意欲が子どもの内に育まれることが重要である。

② 健康な心と体を育てるためには望ましい食習慣の形成が重要であることを踏まえ、離乳食が完了期へと徐々に移行する中で、様々な食品に慣れるようにするとともに、和やかな雰囲気の中で食べる喜びや楽しさを味わい、進んで食べようとする気持ちが育つようにすること。なお、食物アレルギーのある子どもへの対応については、嘱託医等の指示や協力の下に適切に対応すること。

乳児期の摂食機能は、乳汁を吸うことから、食物を噛みつぶして飲み

込むことへと発達していく。これに伴い、母乳又は育児用ミルクなどの乳汁栄養から、なめらかにすり潰した状態の食べ物を経て、徐々にある程度固さや形のある幼児食へと離乳が進んでいく。この時期には、摂取することのできる食品の量や種類が次第に増えていくとともに、食べる楽しみを体験したり、日々の食事のリズムが整っていったりする中で、食べることへの意欲が育まれ、健康な心や体を育てる上で重要な食習慣の形成の第一歩が始まる。

エネルギーや栄養素の大部分を乳汁以外の食物から摂れるようになり、離乳食が完了期を迎える頃の子どもたちは、食事の時間がある程度そろってくるので、同じタイミングで用意の整った友達と一緒に食べ始める場面も現れてくる。

例えば、ある子どもがテーブルに着いて、エプロンをつけてもらおうと、嬉しそうにテーブルを両手でバタバタと打ち、音を出して笑っている。それを見た別の子どもがにこにこしながら同じように音を出す。そこで保育士等が「食事の時間ですよ。一緒に食べようね、楽しいね。」と声をかけながら席に着き、「いただきます」と手を合わせると、子どもたちもそれに続いて手を合わせたり声を出したりしながら、それぞれに手やスプーンを使って食べようとする。保育士等は、一人一人に応じて食べやすいように手に持たせてあげたり、食が進まない子どもには食べさせてあげたりしている。初めて見る食品に手をつけようとしない子どもに、保育士等が「おいしいよ」と声をかけると、子どもはそれを手にして眺めている。そこで保育士等に「おいしいから食べようよ」と再び励まされて、口に入れると、それにまた「おいしいね」と保育士等の声が添えられる。このように、和やかで温かい雰囲気の下、保育士等が一人一人に丁寧に関わり、子どもと保育士等の感情が共有されるような状況の下、子どもの食べることへ向かう気持ちが促されていくことが大切である。

また、食物アレルギーのある子どもの食事に当たっては、第3章の1の(3)のウに示された事項に留意し、職員間で細心の注意を払い合いながらも、他の子どもと一緒に食べているという気持ちをもてるように配慮する。

## イ 社会的発達に関する視点「身近な人と気持ちが通じ合う」

受容的・応答的な関わりの中で、何かを伝えようとする意欲や身近な大人との信頼関係を育て、人と関わる力の基盤を培う。

(ア)ねらい

- ① 安心できる関係の下で、身近な人と共に過ごす喜びを感じる。
- ② 体の動きや表情、発声等により、保育士等と気持ちを通わせようとする。
- ③ 身近な人と親しみ、関わりを深め、愛情や信頼感が芽生える。

社会の中で生きていく人間として、子どもの発達において特に大切なのは、人との関わりである。乳児期において、子どもは身近にいる特定の保育士等による愛情豊かで受容的・応答的な関わりを通して、相手との間に愛着関係を形成し、これを拠りどころとして、人に対する基本的信頼感を培っていく。また自分が、かけがえのない存在であり、周囲の大人から愛され、受け入れられ、認められていることを実感し、自己肯定感を育てていく。さらに、安心できる安定した関係の下で、自分の気持ちを相手に表現しようとする意欲が生まれる。こうした育ちは、生涯にわたって重要な、人と関わり合いながら生きていくための力の基盤となるものである。

身近な人とそうでない人が区別できるようになると、子どもは、普段自分のそばにいて関わってくれる人を安心、信頼できる存在と感じ、その人にあやしてもらったり、自分の声や動きに優しく応えてもらってやり取りをしたりすることを盛んに楽しむ。愛着の対象である特定の保育士等が視界の範囲内にいることで子どもの情緒は安定し、そうした相手と関わりながら共に過ごすことに喜びを感じる。

そして、自分の思いや欲求を伝えようと、相手に向かって手を伸ばし

ながら声をあげたり、顔を見て笑いかけたりと、体の動きや表情、声や喃語等で働きかける。それに対して、保育士等が応答的に触れ合ったり、言葉を添えて関わったりすることで、子どもは次第に相手の言っていることを理解するようになり、自分も言葉で伝えようとする意欲を高めていく。

このように日々の温かく丁寧な触れ合いを重ねる中で、子どもは身近な保育士等に親しみをもち、より気持ちを通わせ、関わりを深めることを求める。こうして乳児期に特定の保育士等との間に芽生えた愛情や信頼感が、子どもが周囲の大人や他の子どもへと関心を抱き、人との関わりの世界を次第に広げていく上での基盤となる。

## (イ) 内容

- |   |
|---|
| ① 子どもからの働きかけを踏まえた、応答的な触れ合いや言葉がけによって、欲求が満たされ、安定感をもって過ごす。 |
|---|

誕生間もない子どもは、人の声に最もよく反応し、話しかける大人の顔をじっと見つめる。こうした子どもの姿に応え、ゆったりと笑顔で働きかけたり、触れ合ったり、子どもの声や行為に言葉を添えていくことで、子どもは自分の欲求を泣き声で表したり、感情を込めて様々な泣き方をするようになる。

保育士等は、こういった子どもの声や表情、体の動きなどから、子どもの欲求を汲み取り、タイミングよく応えていくことが大切である。子どもは、自分のしてほしいことが受け止められ、心地よくかなえられると安心する。欲求をかなえてくれた人に対する信頼感も育まれる。また、特にスキンシップは心の安定につながる。肌の触れ合いの温かさや心地よさを実感すると、子どもは自ら手を伸ばし、スキンシップを求めるようになる。こうした温かなやり取りを保育士等と積み重ねることによっ



て、子どもは安定感をもって過ごすことができるようになる。

② 体の動きや表情、発声、喃語等を優しく受け止めてもらい、保育士等とのやり取りを楽しむ。

首がすわり、手足の動きが活発になると、子どもは対面で相手をしてくれる保育士等に対して、目を見つめて微笑んだり、手足をバタバタと動かしたり、声を出したりするようになる。また、自分の意思や欲求を、声や喃語、身振りなどで、伝えようとするようになる。

保育士等は、こうした声や動き、表情などから、子どもの気持ちを汲み取り、十分に受け止めながら、応答的に関わることが重要である。子どもの微笑みに目を合わせて優しく微笑み返したり、喃語の語りかけに表情豊かに言葉で返すなど、丁寧に子どもの心を受け止めることが大切である。こうした保育士等の関わりによって、子どもは大人の声ややり取りを心地よいものと感じるようになる。次第に、声や表情での感情表現も豊かになり、積極的に保育士等との関わりを求めるようになる。また、このような保育士等とのやり取りの心地よさが、人に対する基本的信頼感の育ちにもつながり、コミュニケーションの土台となる。

③ 生活や遊びの中で、自分の身近な人の存在に気づき、親しみの気持ちを表す。

子どもは、6か月頃には身近な人の顔が分かるようになり、あやしてもらおうと喜んだり、声を出して笑いかけたりするようになる。愛情を込めて受容的に関わる大人とのやり取りを盛んに楽しむようになり、そうした大人との間に形成された愛着関係が更に強まる。子どもは、この絆

を抛りどころとして、徐々に周囲の大人に働きかけていくようになる。一方で、特定の大人との愛着関係が育まれている現れとして、初めて会った人や知らない人に対して泣くなど、人見知りをするようになる。

また、子どもは特定の保育士等との安定した関係を基盤にして、次第に他の子どもに対しても関心をもつようになる。乳児同士であっても、自分とよく似た子どもの存在を認め、表情を模倣したり、はって追ったりするなど、互いに興味を示す姿が見られる。同じ物を見つめたり、同じ遊具を手にしたりするなど、物を介したやり取りも見られるようになり、そうした際に保育士等が声をかけて仲立ちをすることで、その後の子ども同士の関わり合いの育ちへとつながっていく。

**④ 保育士等による語りかけや歌いかけ、発声や喃語<sup>なん</sup>等への応答を通じて、言葉の理解や発語の意欲が育つ。**

子どもは、保育士等の優しい語りかけやゆったりとした歌いかけに、心地よさを感じる。また、保育士等が、子どもの言葉にならない思いや欲求を発声や喃語<sup>なん</sup>などから汲み取り、それを言葉に置き換えながら対応することで、子どもは自分の思いが受け止められる喜びと安心感、そして優しい言葉が返ってくるやり取りの心地よさを感じる。こうした体験を重ねる中で、子どもは保育士等に信頼感をもつようになり、伝えたい、分かってもらいたいという、表現することへの意欲を高めていく。同時に、言葉にならない思いの意味と言葉の音声とがつながりをもち、言葉を理解することにもつながっていく。

また、子どもは、応答的に関わる保育士等に「ほら、見てごらん」と注意を促されて同じものを見つめ、共有する経験を経て、9か月頃になると自身も盛んに指差しをするようになる。自分の欲求や気付いたことを保育士等に伝えようと指し示したりしながら、興味や関心を共有する

ようになる。保育士等がそのものの名前や、欲求の意味を伝えることで、子どもは徐々にそれらを理解するようになり、それが子どもの言葉となる。このように、身近な大人と感覚や感情を共有する経験を重ねることは、言葉の理解や子ども自身の言葉を発したいという意欲を育てていく。

⑤ 温かく、受容的な関わりを通じて、自分を肯定する気持ちが芽生える。

自分を肯定する気持ちは、保育士等が子ども一人一人を尊重し、温かい雰囲気の中で、その思いや欲求をありのままに受け止めるという関わりを重ねることで、子どもの中に芽生えていく。それと同時に、子どもと特定の保育士等との間に情緒的な<sup>きずな</sup>絆が形成され、基本的信頼感も育まれる。またその過程で、子どもは自分がかげがえのない存在であることを感じ取り、愛されていることを実感するようになる。このように自分の存在を無条件に認めてもらえる、またうまくいかない場合も支えてもらえるといった安心できる関係の中でこそ、子どもは自己を十分に発揮し、自信を育むことができる。

乳児期において、保育士等による受容的で応答的な関わりを通して芽生え、育まれていく自分を肯定する気持ちは、生涯にわたって人との関わりの中で生きていく力の基盤となるものである。

### (ウ) 内容の取扱い

① 保育士等との信頼関係に支えられて生活を確立していくことが人と関わる基盤となることを考慮して、子どもの多様な感情を受け止め、温かく受容的・応答的に関わり、一人一人に応じた適切な援助を行うようにすること。

まだ言葉で自分の思いや欲求を十分に表現することができない子どもにとって、泣くことは、自分の思いや欲求を保育士等に訴える手段である。子どもが泣いていると、「泣き止ませなければならない」と考えてしまいがちだが、大切なのは、泣かずにいられない子どもの思いを汲み取り、受け止めて、適切に応えていくことである。

例えば、乳児期前半の子どもの泣きは、眠い、おむつが濡れた、お腹が空いた等の生理的欲求に基づく不快から生じることが多い。汗をかいて服が湿っていれば、「汗かいたね」「さっぱりしようね」などと優しく言葉をかけながら、体を拭き、服を着替えさせて、不快さを心地よさに変えていく。

一方で、生理的欲求以外の要因から生じる不快が、泣きの原因になることもある。寝付きがよくない子どもに、生活リズムを整えようと試行錯誤する中で、子どもの泣きを全て「眠い」ことが原因だと捉えてしまうと、泣きがおさまらないことがある。そうした場合、寝る時間以外の泣きや、それまでの生活を振り返る中で、保育士等との関わりを求めて泣くことがあると分かることもある。そうであれば、目覚めた直後の泣きには「まだ眠いのかな」ではなく、「目が覚めたのね。起きたよって教えてくれたのね。」と言葉をかけ、子どもと触れ合う時間をもつことが必要になる。

このように、子ども一人一人の思いや欲求、感情を受け止めながら、応答的に関わることで、子どもの生活をつくり、保育士等との信頼関係を築くことにもつながっていく。

② 身近な人に親しみをもって接し、自分の感情などを表し、それに相手が応答する言葉を聞くことを通して、次第に言葉が獲得されていくことを考慮して、楽しい雰囲気の中での保育士等との関わり合いを大切にし、ゆっくりと優しく話しかけるなど、積極的に言葉のやり取りを楽しむことができるようにすること。

子どもは、生後2、3か月頃から、機嫌のよい時には「アー」「ウー」など、喉の奥からクーイングと呼ばれる柔らかい声を出すようになる。こうした声に、保育士等も笑顔で同じような声を出して返事をすると、子どももまたそれに応え、やり取りが始まる。4か月頃になると、保育士等があやすと微笑み返すようになり、「アーアー」「バー」などの喃語<sup>なん</sup>を発するようになる。こうした喃語<sup>なん</sup>に、保育士等が音を真似て返したり、「ご機嫌ね」「お話し上手ね」などと優しく語りかけたりして、応えることで、子どもは自分の要求に応じてもらえるという喜びを感じ、声などで自分を表現する意欲が高まる。言葉になる前の子どもの表現に、丁寧に関わり応えていくことが、子どもが人とやり取りする心地よさと意欲を育むのである。

9か月を過ぎる頃になると、子どもは、親しみをもつ保育士等が見ているものを一緒に見たり、自分の持っているものを見せたり、興味があるものを指差したりするようになる。保育士等が「ワンワンいるね」など、子どもが指差す対象を言葉に換えて応えていくことで、目の前の「犬」と「ワンワン」という音声が結び付いて、ものには名前があることが分かり、それが言葉を獲得していくことにつながる。保育士等が、何かを見付け、それを喜ぶ子どもの思いに共感することで、子どもは人に思いを伝える楽しさを感じ、積極的に伝えようとするようになる。

この時期、子どもの喃語<sup>なん</sup>や指差しなどを、保育士等が受け止め、共感し、言葉に置き換え伝えていくことが、子どもの言葉を育て、人とやり

取りすることの喜びと意欲を育むことになる。

保育士等と一緒に絵本を楽しむことは、こうした経験を重ねていくことでもある。絵本は、絵に描かれた状況や感情を共有することを通して子どもと保育士等のやり取りを生み出し、子どもの言葉に応じて、保育士等が言葉を補いながら楽しく言葉のやり取りを展開していくことを可能にする。

例えば、ゆったりとした雰囲気の中で、子どもと保育士等が一对一で絵本を開くと、子どもは犬の絵を指差し「ワンワン」と言葉を発する。保育士等がそれに応えて「ワンワンだね。しっぽをフリフリしているね。」と状況を丁寧に語ると、子どもは保育士等の顔を見上げて「フリフリ」と言う。保育士等はさらに、「フリフリしているね。ワンワン、嬉しいのかな。」と言葉を続ける。

また、こうした絵本を読んだ後散歩に出かけた時、犬に出会うと、子どもが「ワンワン」と指差すことがある。そこで保育士等が「ワンワンだね。絵本のワンワンと一緒にかな。」「しっぽ、フリフリしているかな」と実際の体験と絵本をつなぐ言葉をかけてみる。保育所に戻ると、子どもは先の絵本を手に取り、犬のページを開き喜々としてまた「ワンワン」と言う。このように絵本と言葉、そして実際の体験を重ね合わせる保育士等の援助は、子どもの言葉の獲得を促すとともに、子ども自身が言葉を獲得していくことを喜びとする感覚を育んでいく。

## ウ 精神的発達に関する視点「身近なものとの関わり感性が育つ」

身近な環境に興味や好奇心をもって関わり、感じたことや考えたことを表現する力の基盤を培う。

(ア)ねらい

- ① 身の回りのものに親しみ、様々なものに興味や関心をもつ。
- ② 見る、触れる、探索するなど、身近な環境に自分から関わろうとする。
- ③ 身体の諸感覚による認識が豊かになり、表情や手足、体の動き等で表現する。

子どもは、自分を取り巻く環境にその体を通して触れ、様々な外界の刺激を感じ取る。保育士等との安定した関係を拠りどころに、そうした刺激を驚きや喜びをもって受け止め、更にいろいろなものに触れたり関わったりすることへの興味や好奇心を高めていく。同時に、自分が感じ取り受け止めたことを表情や声など体全体を使って表し、それに対する保育士等からの共感的な関わりを得ることで、他者に自分の思いを伝えたい、表したいという気持ちも膨らんでいく。これらは、子どもが環境との豊かな関わり合いを通して、自分の生きる世界を広げたり深めたりしていく上での基盤となるものである。

乳児期は、身近な人やものとの直接的な関わりを通して、その意味や性質、特徴などを感覚によって捉えている時期である。眺めたり、触ったり、なめたりと様々に試しながら対象に親しみ、満足感や面白さを味わって、更に周囲への興味や関心を高める。

また、子どもは何かをじっと見つめたり、手にしたものを何度もあれこれと試してみたりする中で、その変化や反応する様子から、自分と環境の関係にも感覚的に気付いていく。そして、そうした様子に不思議さや楽しさ等を感じ、更に自分から関わろうとする意欲が育まれていく。

こうして体の諸感覚を十分に働かせながら遊び込む経験を重ねて、子どもの認識する世界は豊かさを増していく。その過程に保育士等が寄り添い、「きれいだね」「なんだろう、不思議だね」と子どもが捉えたものを一緒に受け止め、意味付けをする。このように自分の感じ取ったものを身近な人と共有する喜びと体の育ちに支えられて、子どもが自ら思いを表現しようとする意欲と力も培われていくのである。

## (イ) 内容

- |   |
|---|
| ① 身近な生活用具、玩具や絵本などが用意された中で、身の回りのものに対する興味や好奇心をもつ。 |
|---|

身の回りの環境に対する子どもの興味や好奇心は、その生活を豊かにするとともに、この時期の心身の発達を促す。例えば、手の届くところに興味を引く玩具などがあると、子どもはそれを目指してはって行ったり伝い歩きをしたりして近づき、つかもうとする。そして手に入ると、それを振ったり、床に打ちついたり、手から離れて転がっていくのを追いかけるなどして、物との新しい関わりを発見し、さらにそこで偶然生じた音や形の変化などに驚いたり、面白さを感じたりして、次はこうしてみよう、こうしたらどうなるだろうと、その子どもなりの遊びを発展させていく。

また、保育士等に絵本を読んでもらっている時、知っているものの絵を見付け、指差してその喜びを保育士等に伝える。また、気に入ったページを何度もめくって前後の展開を繰り返し楽しんだり、語りの声の調子やフレーズに耳を傾け、その音の響きやリズムに合わせて体を揺らしたり自分も声を出したりする。そうした子どもの様子に、保育士等も温かく応答し、その味わっている世界を共有する。このように、諸感覚を使いながらものを介して身近な人と心を通い合わせる経験が、更に身の



回りの様々な環境への興味や好奇心を旺盛にかきたてる上での支えにもなる。

このように、子どもの主体性を尊重した生活や遊びは、子どもが身近なものに興味をもち、自らで行動しようとする意欲を育て、同時に、人との関わりの力や体の諸感覚をも育てているということに留意する。

**② 生活や遊びの中で様々なものに触れ、音、形、色、手触りなどに  
気づき、感覚の働きを豊かにする。**

子どもは、例えば雨の音、風に揺れる木々の音や動き、天井に映る光と影、虫の声など、自然現象をはじめとして感覚を刺激する有形無形の様々なものや事象に囲まれて生活している。心が安定し、静かで落ち着いた環境の下では、子どもたちはわずかな音やささやかな動きであっても敏感にそれらに気づき、何かを感じて保育士等に知らせる。これらの発見に、保育士等が共感的に応え意味を付与することで、子どもの細やかで敏感な感性が育つ。

子どもは感じ取ったものを保育士等と一緒に味わうことで、その美しさや不思議さ、魅力に気付いていく。日々の生活の中でこうした経験が蓄積されていった先に、子どもの豊かな情感は育ち、更に周囲のいろいろなものや事象に気付いていく。そして、保育士等と一緒に、あるいは自らそれらに浸ることで、身近な環境に目を留め、心をひかれ、愛おしんだり慈しんだりする気持ちが育つ。

保育所の生活や遊びを繰り広げる中で、様々につくり出されたり生み出されたりする音や動き、ものの形、色、手触りなどは、子どもの気づきを促し、感覚の働きを豊かにする環境として重要である。保育士等は、この時期の子どもが受け止められる程度のほどよい複雑さをもった環境を構成することが求められる。

③ 保育士等と一緒に様々な色彩や形のものや絵本などを見る。

この時期に保育士等と一緒に絵本を見たりする場面は、基本的に一对一の関わりである。保育士等と一緒に絵本を見ることは、その絵や話の内容そのものだけでなく、保育士等のその子どもに対する愛情に基づいた願いや気遣いなどを、子どもが絵本の世界と一体的に受け止める経験でもある。

気持ちが不安定な時に、保育士等の膝に乗せてもらい、落ち着いた優しい声とともに絵本に触れ、不安を受け止めてもらうことで、子どもの気持ちは安定していく。また、別の時には、同じ絵本でも、一緒に色や形などを楽しみながらその感覚の世界に浸り、自らの感覚を研ぎ澄ましていくこともある。

絵本の中に身の回りのものを見つけて、絵本のイメージの世界と日常の世界を行ったり来たりする経験は、ふりや見立てを楽しむその後の象徴遊びにもつながっていく。保育の環境を構成するに当たっては、一人一人の子どもの発達過程や興味を考慮した絵本やものなどを選ぶよう心がけたい。

④ 玩具や身の回りのものを、つまむ、つかむ、たたく、引っ張るなど、手や指を使って遊ぶ。

子どもは身の回りのものに「触ってみたい」と向かっていき、うまくつかんだり落としたりなど様々な経験を重ねながら、手指の操作が次第に巧みになっていく。積み木などを見付けるとそれに手を伸ばし、次第に両手に持って打ち付けたりたたき合わせたりするようになる。また、

手のひら全体でものを包み込むように握る状態から、全ての指で握る状態を経て、乳児期の終わり頃には、親指と他の指を向かい合わせて握る状態へと変わってくる。

そして、手指を使い身の回りのものを引っかいたり、つまんだり、握ったりする中で、様々に変化するものの面白さに気づき、ものに働きかけ、じっくりと関わる喜びを経験する。

このような遊びの中で行われる保育士等の言葉がけは、感覚的な理解と言葉による理解の橋渡しをするものとなる。手や指を使って玩具などでじっくりと遊び込むことを通して、子どもは具体的な対象を介して人とやり取りをしたり、試行錯誤を重ねたりする経験をしていくのである。

保育士等は、一人一人の子どもの発達過程や興味、関心を理解し、それに沿って子どもの探索活動が盛んになるような環境を構成するよう心がけ、遊びをどのように発展させていくかを考えることが重要である。

**⑤ 保育士等のあやし遊びに機嫌よく応じたり、歌やリズムに合わせて手足や体を動かして楽しんだりする。**

子どもは、あやし遊びを通して、保育士等による表情豊かな関わりの中で、心地よい気持ちのやり取りを楽しむ。その心地よさを体全体で表すようになり、体や手足が動くことの喜びを体験する。

よく動く手足や体は、自らの欲求を自らの行動で充足できるという意味で、自立の基礎でもある。活発に体を動かす経験を十分にすることは、体や手足がある程度思いのままに動くことへの喜びを伴うものであり、それは1、2歳頃の「自分でしようとする意欲」につながるものである。

保育士等の歌やリズムに合わせて、体を動かすことを楽しみ、近くで同じ動作をする他の子どもと共鳴し合って楽しさを分かち合うことは、自分の気持ちを他の子どもに伝えようとする事へとつながる経験とも

なる。

このように、体をよく動かすことは、子どもが人と関わり合うことや自分を表現することとも密接に関連している。自分の意思でよく動く体は、生活や遊びの中で、寝返り、腹ばい、はいはい、つたい歩き、立つなどの基本的な運動機能を獲得することと並行して育っていく。

### (ウ) 内容の取扱い

- ① 玩具などは、音質、形、色、大きさなど子どもの発達状態に応じて適切なものを選び、その時々の子どもの興味や関心を踏まえるなど、遊びを通して感覚の発達が促されるものとなるように工夫すること。なお、安全な環境の下で、子どもが探索意欲を満たして自由に遊べるよう、身の回りのものについては、常に十分な点検を行うこと。

個人差や月齢の違いによる発達差の大きいこの時期の子どもの探索意欲を満たすために、保育士等は一人一人の子どもが今どのようなものに興味をもっているのかを理解することが重要である。そして、子どものこれまでの経験やこの先の発達の見通しを踏まえ、子どもが興味や関心をもってその遊びを継続したり発展させたりしていくことが期待される環境とはどのようなものかということを考える必要がある。その上で、その時その子どもにふさわしい玩具などを適切に選び、子どもが落ち着いて遊びに気持ちを注ぐことのできる環境を構成することが求められる。そのため、この時期の子どもにふさわしい玩具を選ぶ際には、その音の大きさや質、形や手触り、色合い、大きさや重さ、持ちやすさなど、子どもの感覚や動きに照らして吟味する。

また、一人一人が充実して遊べるように、場所の広さや動線、他者の存在の気配など、空間のつくり方にも配慮する。例えば、保育室の遊び

のコーナーを、一人一人に合わせて遊べるよう更に小さなコーナーに分け、玩具やものを用意する。コーナーは保育士等からは全体が見えるように背の低い安定した家具で仕切るなどして、圧迫感を感じさせないように考慮しながら、子どもにとって落ち着ける空間にする。さらに、保育士等は連携をとりながら、子どもの生活のリズムに合わせてゆったりとそこにいることで、子どもも安定して遊び込むことができるようにし、子どもの欲求に応じて一緒に遊んだり、見守ったりする。コーナーの玩具等は、破損や衛生に気を配り、怪我や事故などが起きないように留意する。日頃から状態の点検や確認を心がけるとともに、素材の強度や手入れのしやすさなどに配慮して用意することも大切である。

② 乳児期においては、表情、発声、体の動きなどで、感情を表現することが多いことから、これらの表現しようとする意欲を積極的に受け止めて、子どもが様々な活動を楽しむことを通して表現が豊かになるようにすること。

乳児期のコミュニケーションは、表情や仕草、泣き、発声などによる感情の表出を通してなされる。子どもの細やかな感情の表出は、例えば担当制などを通して、ある程度特定の保育士等が継続的に関わることでより細やかに理解しやすくなる。

このような体制の下で、一人一人の覚醒と睡眠のリズムを知り、しっかりと眠り、目覚めることに配慮することで、目覚めている時間を充実して過ごせるようにする。例えば、授乳や離乳食の時間に、子どもの欲求に応え、保育士等が優しく短い言葉でゆったりと関わることで、子どもも盛んに相手からの働きかけに応える。また、保育士等と一緒に玩具などで遊び、その思いがけない動きに手足を動かして驚いたり喜んだりするなど、感情を全身で表現しようとする。いないいないばあなどの遊

びで、子どもの予想通りに保育士等の顔が出てきたり、反対に予想を裏切る動きがあったりして、乳児は期待感を膨らませたり驚いたり、様々な感情の揺れ動きを経験する。子どもが感性や感情を豊かにもち、表現する力を身に付けていくために、生活や遊びの全般を通して、保育士等がその時々に合わせて表情豊かに関わるのが重要になる。

### (3) 保育の実施に関わる配慮事項

ア 乳児は疾病への抵抗力が弱く、心身の機能の未熟さに伴う疾病の発生が多いことから、一人一人の発育及び発達状態や健康状態についての適切な判断に基づく保健的な対応を行うこと。

抵抗力が弱く、感染症などの病気にかかりやすい乳児の保育の環境については、最大限の注意を払うことが必要である。特に、産後休業明けから入所する子どもについては、生命の保持と情緒の安定に配慮した細やかな保育が必要である。

乳児にとって、清潔で衛生面に十分留意された生活や遊びの場となるよう、日々環境を整えることが求められる。

また、一人一人の発育及び発達の状態、通常健康状態をよく把握した上で、常に心身の状態を細かく観察し、疾病や異常は早く発見し、速やかに適切な対応を行うことが必要である。観察に当たっては、機嫌・顔色・皮膚の状態・体温・泣き声・全身症状など様々な視点から、複数の職員の目で行うことも大切である。

イ 一人一人の子どもの生育歴の違いに留意しつつ、欲求を適切に満たし、特定の保育士が応答的に関わるように努めること。

乳児期の子どもが成長する上で、最も重要なことは、保育士をはじめとした特定の大人との継続的かつ応答的な関わりである。

保育士等は、生育歴の違いを踏まえ、一人一人の現在のありのままの状態から子どもの生活や発達過程を理解し、必要な働きかけをすることが大切である。

また、子どもの欲求に応答して、人と関わることの心地よさを経験で

きるようにすること、すなわち、子どもが声や表情、仕草や動きなどを介して表出する要求に、タイミングよく共感的に応えていくことが大切である。子どもは、保育士等からの心地よいと感じられる行為によって、人への信頼感を得る。さらに、安心できる人との相互的な関わりの中で、情緒が安定し、ものや出来事の意味、言葉、人との関係、運動機能、感情の分化などが混然一体となった経験を積み重ねる。こうした経験を通して、この時期の発達には心身の諸側面が特に密接に関連し合いながら促されていく。この時期に人に対する基本的な信頼感を獲得することが、生きていく基盤となることの重要性を十分に認識しながら、保育していくことが求められる。

**ウ 乳児保育に関わる職員間の連携や嘱託医との連携を図り、第3章に示す事項を踏まえ、適切に対応すること。栄養士及び看護師等が配置されている場合は、その専門性を生かした対応を図ること。**

第3章に示されているように、健康及び安全に関する事項は、乳児期における子どもの生活の基底をなすものである。朝の受け入れ時の視診から引渡し時まで、保育所の全職員がその専門性を発揮して関わるのが重要である。

授乳や離乳については、必要に応じて嘱託医や栄養士、看護師などと連携し、子どもの健康状態などを見ながら、一人一人の状態に合わせて進めていく。

睡眠時には、子どもが安心して眠ることができるよう、窒息リスクの除去（子どもの顔が見える仰向けに寝かせる、一人にしない等）を行うなど、安全な環境を整えることが重要である。

また、健康の増進が図られるよう、気温や天候などの状況や乳児の体調に留意しながら、外気浴や保育室外での遊びを多く取り入れることも



必要である。その際、窒息・誤飲・転倒・転落・脱臼等、予想される危険や事故に対し、それぞれの職種の専門性を生かして予防のための対策や配慮、確認に取り組む必要がある。

(参考)

○授乳・離乳の支援ガイド（平成19年3月14日厚生労働省）

**エ 保護者との信頼関係を築きながら保育を進めるとともに、保護者からの相談に応じ、保護者への支援に努めていくこと。**

乳児保育においては、特に保護者との密接な連携が重要である。保育士等は、成長や発達が著しいこの時期の子どもの様子や日々の保育について、温かい視点をもって捉えたことを詳しく伝えながら、発達過程において必要な活動、すなわち生活や遊びの意味や大人の役割を伝えていく。また、各保護者にそれぞれの生活の状況や保育所とは環境の異なる家庭における食事や排泄<sup>せつ</sup>、睡眠等の様子を丁寧に聴きとっていくことは、子どもを理解する上でも必要である。保護者の就労や子育てを支え、保護者の気持ちに配慮して対応し、送迎時には気持ちよい挨拶や励ましの言葉がけを行う。

子育てを始めた当初は、育児に不安を抱き、悩みを抱えるなど、保護者一人一人の状況は様々である。第4章の2の保育所を利用している保護者に対する子育て支援に係る事項を踏まえ、保護者と信頼関係を築きながら、子どもの成長や発達の喜びを共に味わっていくことが大切である。

**オ 担当の保育士が替わる場合には、子どものそれまでの生育歴や発達過程に留意し、職員間で協力して対応すること。**

年度替わりあるいは年度途中で、担当の保育士が替わる場合、特に乳児保育では特定の保育士等との密接な関わりが重要であることから、子どもが安定して過ごすことができるための配慮が大切である。生育歴や発達過程等における個人差だけでなく、それまでの家庭やクラスにおける生活や遊びの中での子どもの様子や、一人一人が好きな遊びや玩具、絵本などについても、担当者間で丁寧に引き継いでいくようにすることが必要である。一人一人への働きかけや対応が急激に変わることはないよう、職員間で協力し、子どもにとって心地よいと感じる環境や保育士等との関係に即した対応が必要である。

周囲の職員は子どもと新しい担当の保育士との信頼関係を築くことができるよう配慮するとともに、子どもがそれまでの経験の中で培ってきた人と関わる力を信じることも大切である。担当の保育士を心の拠りどころとして、様々な人と関わり、多くの人の温かいまなざしの中で子どもが成長していくことを理解し、全職員で見守っていくことが大切である。

## 2 1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容

### (1) 基本的事項

ア この時期においては、歩き始めから、歩く、走る、跳ぶなどへと、基本的な運動機能が次第に発達し、排泄<sup>せつ</sup>の自立のための身体的機能も整うようになる。つまむ、めくるなどの指先の機能も発達し、食事、衣類の着脱なども、保育士等の援助の下で自分で行うようになる。発声も明瞭になり、語彙も増加し、自分の意思や欲求を言葉で表出できるようになる。このように自分でできることが増えてくる時期であることから、保育士等は、子どもの生活の安定を図りながら、自分でしようとする気持ちを尊重し、温かく見守るとともに、愛情豊かに、応答的に関わる必要がある。

イ 本項においては、この時期の発達の特徴を踏まえ、保育の「ねらい」及び「内容」について、心身の健康に関する領域「健康」、人との関わりに関する領域「人間関係」、身近な環境との関わりに関する領域「環境」、言葉の獲得に関する領域「言葉」及び感性と表現に関する領域「表現」としてまとめ、示している。

ウ 本項の各領域において示す保育の内容は、第1章の2に示された養護における「生命の保持」及び「情緒の安定」に関わる保育の内容と、一体となって展開されるものであることに留意が必要である。

この時期は、歩行の開始をはじめ、走る、階段を上がる、両足で跳ぶなど、徐々に基本的な運動機能が発達し、自分の体を思うように動かすことができるようになってくる。生活習慣においても、手を使ってできることが増え、身の回りのことを自分でしようとする。

言葉の発達においては、言葉の理解が進み、自分の意思を親しい大人に伝えたいという欲求も高まる。指差し、身振り、片言などを盛んに使

い、応答的な大人とのやり取りを重ねる中で、この時期の終わり頃には、自分のしたいこと、してほしいことを言葉で表出できるようになる。また、玩具等を実物に見立てるなどの象徴機能が発達し、言葉を交わす喜びを感じながら、大人と一緒に簡単なごっこ遊びを楽しむようにもなる。

自我が芽生え、1歳半ば頃から強く自己主張することも多くなる。自分の思いや欲求を主張し、受け止めてもらう経験を重ねることで、他者を受け入れることができ始める。また、友達や周囲の人への興味や関心も高まり、自発的に働きかけていくようにもなる。子ども同士の関わりが徐々に育まれていく時期である。

一方で、自分の思う通りにはできずもどかしい思いをしたり、寂しさや甘えたい気持ちが強くなって不安定になったりと、気持ちが揺れ動くこともある。保育士等は、子どものまだ十分には言葉にならない様々な思いを丁寧に汲み取り、受け入れつつ、子どもの「自分でしたい」という思いや願いを尊重して、その発達や生活の自立を温かく見守り支えていくことが求められる。

こうした発達の特徴を踏まえて、本節ではこの時期の保育の内容を「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の五つの領域によって示している。子どもの発達は諸側面が密接に関連し合うものであるため、各領域のねらいは相互に結び付いているものであり、また内容は子どもの実際の生活と遊びにおいて総合的に展開されていく。

これら五つの領域に関わる保育の内容は、乳児保育の内容の三つの視点及び3歳以上児の保育の内容における五つの領域と連続するものであることを意識し、この時期の子どもにふさわしい生活や遊びの充実が図られることが重要である。

また、著しい発達の見られる時期であるが、その進み具合や諸側面のバランスは個人差が大きく、また家庭環境を含めて、生まれてからの生活体験もそれぞれに異なる。生活や遊びの中心が、大人との関係から子

ども同士の関係へと次第に移っていく時期でもある。保育においては、これらのことに配慮しながら、養護と教育の一体性を強く意識し、一人一人の子どもに応じた発達の援助が求められる。

## (2) ねらい及び内容

### ア 心身の健康に関する領域「健康」

健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う。

#### (ア)ねらい

- ① 明るく伸び伸びと生活し、自分から体を動かすことを楽しむ。
- ② 自分の体を十分に動かし、様々な動きをしようとする。
- ③ 健康、安全な生活に必要な習慣に気付き、自分でしてみようとする気持ちが育つ。

身近な大人から一人の人間として自分の意思が尊重され、安心して様々な物事に取り組むことができる環境の下、子どもは今の自分が持っている心身の力を存分に発揮して、自分でしてみようとする気持ちを強くしていく。健康で安全な生活を送るための基盤は、この時期のこうした自分の日常を自ら支えていくことへの意欲があってつくられていくものである。

乳児期を経て、歩行の開始など心身共に様々な力をつけてきた子どもは、旺盛な好奇心を周囲の環境に向けて積極的に関わろうとする。一人で遊んだり、保育士等と一緒に遊んだりする中で、伸び伸びと十分に体を動かし、思いを実現する体を獲得していく。

そして、様々な遊びを楽しむ中で、走る、登る、跳ぶ、蹴る、投げる、もぐる、くぐるなど、体の様々な動きや姿勢を伴う遊びを繰り返し楽しむ。そうした遊びは子どもの行動範囲を拡大し、身体や運動の機能を高めるとともに、人やものとの関わりを更に広げていく。

一方、食事や着替えなど日常の基本的な生活習慣にも興味や関心を向け、それらを自分でしようとする。最初はできないことも多いが、保育士等による子どもの思いやペースを尊重した丁寧な関わりを通して、子

どもは健康で安全な生活を維持するための日々の習慣の意味に気付いていく。また、試行錯誤を重ねながら自分でできた時の達成感や心地よさを味わうことで、主体的に生活を営むことへの意欲が高まる。

## (イ) 内容

### ① 保育士等の愛情豊かな受容の下で、安定感をもって生活をする。

子どもの安定感は、愛情豊かで子どもにとって心地よい保育士等の関わりの下、一人一人の子どもが受け入れられていると感じる時に得られるものである。そのため、保育士等はその時々の子どもの欲求や興味、関心を理解し、応答的に関わることが重要になる。このような応答的な関わりを基本にしながら、子どもたちが慣れ親しんでいる遊具などを通して一緒に遊び、子どもの発達過程に必要な人との関わりやものを通じた感覚の育ちを意識して環境を構成する。また、保育士等は、時に仲立ちをしながら、子ども同士が一緒にいて心地よいと感じ、楽しく遊べるように遊びを展開する。

長時間の保育所での生活において、保育士等が交代する時には、子どもに関する情報を伝え合うなど、子どもが一日を通して安定感をもって過ごせるようにすることも大切である。

### ② 食事や午睡、遊びと休息など、保育所における生活のリズムが形成される。

子どもは、身体的な成熟とともに、日々の生活の中で心地よさを感じ充実感を伴う様々な経験を積み重ねることで、生活のリズムが次第に整

ってくる。家庭環境や個人差による違いもあるが、午睡が1回となり、その時間もある程度一定になってきて、遊びの時間がより充実してくる。

低年齢の子どもの保育や集団での生活に慣れない時期の保育では、原則として、空腹を感じた時に食べ、眠い時に寝て、すっきりと目覚めて遊ぶという個々の子どもの生理的なリズムに沿った生活が、子どもに心身両面の安定感をもたらすことへの配慮が求められる。

安定した生活のリズムがつくられてくると、子どもは、一日の生活の流れをおおよそ見通すことができるようになる。例えば、園庭で遊ぼうと声をかけられると、自分から帽子を取りに行ったり、靴を履こうとしたりするようになる。このように、生活のリズムを獲得することによって、子どもは、これから起こる出来事を自分なりに期待や予測をもって迎えるようになっていく。

### ③ 走る、跳ぶ、登る、押す、引っ張るなど全身を使う遊びを楽しむ。

歩行を開始し、ある程度思うように体が動くようになってくる時期には、身体を使って動くことが心地よさや喜びをもたらすような活動や環境が大切である。高いところやでこぼこ道、坂道、トンネルなど多様な環境に合わせて、様々な身体の動きを獲得していく。

保育士等は、この時期の子どもが様々な身体を動かすことを体験するために必要な環境を構成する。子どもの興味や関心に合わせて、段差のあるところから飛び降りる、傾斜のあるところを歩いて上ったり下りたりする、力を入れて遊具を引いたり押したりしながら往復するなど、全身を使ういろいろな遊びを一緒に楽しみたい。体全体を使う喜びを伴った遊びは、運動に関わる諸機能を発達させるとともに、子どもが自分の体で様々な感覚を体験することをもたらす。



④ 様々な食品や調理形態に慣れ、ゆったりとした雰囲気の中で食事や間食を楽しむ。

保育士等は、子どもが、それまでに家庭や保育所等でそれぞれに異なる生活体験をしていることを理解した上で保育を行う必要がある。

おいしさや食べることの心地よさ、満足感などを表現する保育士等の気持ちや雰囲気を感じながら、子どもの感覚と行為、言葉が一致していく。保育士等を模倣しながら、初めて口にする素材や調理方法の食べ物にも次第になじんでいく。こうして知っている食品の味や形態の種類が増えていくと、食べるのが楽しみになる。食事を取る時に、「初めての味だけど、さっぱりしていて食べやすいよ」「トロトロに煮込んであるからおいしいよ」といった快の気持ちを伴う言葉を保育士等からかけられることによって、子どもにもそうした感覚が育っていく。

このように食べることそのものを楽しむ経験を重ねるとともに、保育士等や友達とテーブルを囲み、食べ物の形を何かに見立てたり、話をしたりしながら、子どもは食事の時間を楽しく過ごす。穏やかでくつろいだ雰囲気の下、保育士等や友達と一緒に食事を楽しむ経験は、子どもたちに安心感をもたらし、同時に生活を共にする子ども同士の関係を心地よいものにしていく。

⑤ 身の回りを清潔に保つ心地よさを感じ、その習慣が少しずつ身に付く。

子どもは、日常生活における保育士等からの援助や関わりを通して、身近を清潔にすることに関わる様々な状況の意味や理由を体験的に理解し、自ら清潔を保つために行う習慣を身に付けていく。

例えば、トイレから出てきて石けんで手を洗う時や、外遊びの後に服が汗や泥で汚れている時などに、保育士等が「きれいにしようね」「さっぱりしたね」と子どもに分かりやすい言葉で意味を添えながら根気よく関わり続けていくことで、子どもは行為に伴う心地よさの感覚と意味を結び付けて、その必要性を理解する。

同じように、「外に行く時は靴を履こう」と言葉をかけることは、子どもに、靴を履くという具体的な行為とともに内と外の区別などを一緒に伝えることになる。

保育士等は、保育の環境を整え清潔に保つとともに、子どもたちが清潔に関わる行為の意味を感じ取るような言葉かけをすることが重要である。

**⑥ 保育士等の助けを借りながら、衣類の着脱を自分でしようとする。**

この時期の子どもは、毎日繰り返されることについては、その流れや手順について「こうすればこうなる」とある程度の予想ができるようになってきており、自分なりに工夫して取り組もうとする姿が見られることも多い。保育士等は、こうした子どもの「自分でしよう」という気持ちを尊重して見守ることが重要である。

例えば、保育士等が子どもに「散歩に行くよ」と声をかけると、自分の帽子を取りに行ってかぶろうとしたり、靴を自分で履こうとしたりする。このように子どもが衣類の着脱を自らしようとする時には、保育士等はゆとりをもってその様子を見守り、できないところを「こうしたらよいよ」と行為を言葉にしながらかつ援助する。

また、衣類の着脱に気持ちが向かわない子どもには、例えば手を電車に、袖をトンネルに見立てて、「電車がトンネルを通るよ」などと働き

かけながら、その子どもの興味からつなげていくようにする。できた時には、それが喜びになるような言葉かけをすることも重要である。

⑦ 便器での排泄<sup>せつ</sup>に慣れ、自分で排泄<sup>せつ</sup>ができるようになる。

身体の諸機能の発育・発達に伴い、子どもが自分で排泄<sup>せつ</sup>することが可能となってくる。排泄<sup>せつ</sup>の自立に向かう時期には、子どもの「自分でできる」「自分でしたい」という自信や意欲を育むことも重要である。

おむつが濡れている時には「きれいにしようね」と声をかけながら交換し、清潔になる心地よさを子どもが経験するようにする。排尿の素振りが見られる時には、タイミングよく優しい言葉でトイレに誘う。

また、ぐっすりと眠った後など、おむつが濡れていない時がある。そうした時に、声をかけてトイレに誘ってみる。子どもが嫌がった場合にはその気持ちを受け入れるが、トイレに行ってみようという気持ちが起きた場合には一緒に付き添う。そして、気持ちを込めて排泄<sup>せつ</sup>を促すような言葉かける。便器で排泄<sup>せつ</sup>ができた時には、一緒に喜ぶ。トイレに行っても出ない時には、適度な頃合いで「おやつの後にはしようか」など優しく対応する。

このように、保育士等が焦らずに一人一人の子どものペースを尊重して対応することで、子どもは次第に必要なに応じて自分からトイレに行けるようになっていく。

## (ウ) 内容の取扱い

- ① 心と体の健康は、相互に密接な関連があるものであることを踏まえ、子どもの気持ちに配慮した温かい触れ合いの中で、心と体の発達を促すこと。特に、一人一人の発育に応じて、体を動かす機会を十分に確保し、自ら体を動かそうとする意欲が育つようにすること。

歩行が開始されると、周囲のあちこちに次々と興味を向け、そこへ行ききたがるようになる。歩く時の姿勢も次第に安定し、手を自由に使えるようになって、様々な遊具で遊ぶようになる。また、興味をもったものや遊具で保育士等に一緒に遊んでもらい、遊ぶ楽しさを経験することを通して、子どもは自分から遊び出し、遊びに夢中になり、より意欲的に遊ぶようになる。このように、遊びにおいて子どもの心と体は密接に関わり合っており、保育士等の関わりに支えられて遊び込む経験は、心身両面の発達を促していく。

子どもが伸び伸びと体を動かし、この時期の遊びが充実したものとなるようにするためには、発達の個人差などを踏まえて、一人一人の子どもの興味や関心に沿った環境を構成するとともに、その行動範囲や動線を視野に入れて空間の取り方や区切り方を工夫することが重要である。また、それぞれに親しんでいる遊具などを仲立ちにして子ども同士で遊ぶこともあるが、言葉でのやり取りがうまくいかずに遊びが成立しないことも多いので、保育士等が仲立ちになって、その遊びが発展するように関わる。

こうした保育士等の配慮が、子どもが自ら体を動かそうとする意欲を育てる。

② 健康な心と体を育てるためには望ましい食習慣の形成が重要であることを踏まえ、ゆったりとした雰囲気の中で食べる喜びや楽しさを味わい、進んで食べようとする気持ちが育つようにすること。なお、食物アレルギーのある子どもへの対応については、嘱託医等の指示や協力の下に適切に対応すること。

保育所における一日の生活の流れにおいて、充実した遊びの時間を過ごし、規則正しいリズムで生活することにより、自然に子ども自身の食習慣が形成されていく。例えば、遊んでいる時に、園庭までおいしそうな給食のにおいが漂ってくる。夢中で遊んでいた子どもが、においにつられて保育室に入ろうとする。保育士等は、状況に応じて「お腹が空いたね。お昼にしよう。」などと言って子どもを食事に誘ったりする。

ただし、発達の個人差やそれぞれの家庭における生活の状況や習慣の違いなどもあり、食事を始めるタイミングや食事にかかる時間は、子どもによって違いもある。ゆったりと落ち着いた雰囲気の中で、友達と一緒に食べる楽しさを経験しつつ、急かされたり待たされたりせず一人一人のペースが尊重されることで、それぞれにとって食事が心身両面において心地よく満たされた気持ちを味わう時間となるようにする。

そのために、例えば、保育室における食事と午睡や休息の空間の分け方を工夫し、遊び、食事から午睡に至る一連の流れが一人一人のペースに応じたものとなりやすいようにすることが考えられる。また、食事の提供に当たって、個々の子どもの空腹の具合や食べたい気持ち、もう少し遊んでからという気持ちなどに配慮することも大切である。

食物アレルギーのある子どもに対しては、第3章の1の(3)のウに示された事項に留意し、医師の診断・指示の下、保護者や調理員等との連携を図り、食材や調理の仕方などを工夫することが必要である。また、保育所での食事の時間に満足が得られるよう、職員間での連携体制や子

どもの席の位置、周辺的环境などに配慮することが求められる。

- ③ 排泄<sup>せつ</sup>の習慣については、一人一人の排尿間隔等を踏まえ、おむつが汚れていないときに便器に座らせるなどにより、少しずつ慣れさせるようにすること。

排泄<sup>せつ</sup>の間隔やタイミングは、家庭での生活や子どもの身体面の発達によっても異なる。一人一人の状況を把握して、子ども自身がトイレに行くことに興味をもったり、排尿の素振りが見られたりした時に、優しく言葉をかけて誘い、便器に座ってみよう促す。失敗することもあるが、そのことを殊更に叱ったり、気持ちののらない様子の時に長い間便器に座らせたりするのではなく、子どもが自分で伝えることができたり、うまくいった時に一緒に喜び、自信や達成感を味わうことを大切にする。

こうした保育所での取組や対応の仕方などについては、連絡帳などで家庭にも伝え、無理のない範囲で家庭と共に取り組めるようにする。保育士等は、子どもがどうすれば無理なく心地よさを得られるかということを考え、子どもの気持ちを理解しタイミングよく誘うことを心がける。他の子どもと比べたり便器に座ることが苦痛に感じられる体験となったりすることがないように、焦らずゆったりとした気持ちで見守りながら、子どもの状況に合わせて援助することが重要である。

④ 食事、排泄<sup>せつ</sup>、睡眠、衣類の着脱、身の回りを清潔にすることなど、生活に必要な基本的な習慣については、一人一人の状態に応じ、落ち着いた雰囲気の中で行うようにし、子どもが自分でしようとする気持ちを尊重すること。また、基本的な生活習慣の形成に当たっては、家庭での生活経験に配慮し、家庭との適切な連携の下で行うようにすること。

この時期の「自分でしようとする」気持ちは、子どもの身近な事柄に向かう。生活習慣の形成は、子どもの自分でやりたいという気持ちを受け入れて、急がずに子どものペースに合わせて、子どものできないところを援助することが重要である。

このような関わりの中で少しずつできることが増えて、自分ですることに自信をもつようになり、子どもは「自分でする」「一人でしたい」と主張するが、実際にしてみるとまだまだ思うようにいかないこともある。そこで、保育士等によって励まされたり、具体的な助言を得たり、一部手伝ってもらったりしながら、簡単には諦めず試行錯誤を続ける。それは、基本的な生活習慣に関わる行動が、試行錯誤の中で少しずつ修正されてできるようになっていく過程である。

自分の思うことを自分で試みようとしている姿は、この時期の自立へ向かう大切な姿である。家庭には、子どもが自分でしようとするこの意味とともに、保育所での対応とその意図も丁寧に伝えていくことが望ましい。自分でやりたいという子どもの気持ちに共感し、温かく、長い目で見守ることを、家庭とも共有していくことが重要である。

## イ 人との関わりに関する領域「人間関係」

他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う。

(ア) ねらい

- ① 保育所での生活を楽しみ、身近な人と関わる心地よさを感じる。
- ② 周囲の子ども等への興味や関心が高まり、関わりをもとうとする。
- ③ 保育所の生活の仕方に慣れ、きまりの大切さに気付く。

この時期の子どもは、身近な保育士等との愛着を拠りどころにして、少しずつ自分の世界を拡大していく。人への基本的信頼感に支えられ、また生活や遊びへの気持ちは高まる中で、周囲の同年代の子ども等に興味を示し、自ら関わりをもとうとするようになる。こうした意欲が、この時期の豊かな生活や遊びを支え、その中で子どもは人と関わり合うことの楽しさや一緒に過ごすことの喜び、安心感といったものを味わう。こうした経験が、人と関わる力の基礎を培っていく。

子どもは保育士等の存在によって、次第に保育所の生活に慣れ、楽しく充実した生活や遊びの中で、周囲の人との関わりを深めていく。例えば、保育士等が日々温かく迎えてくれる笑顔や挨拶に気付き、それらを自らも試してみながら、身近な人と関わりをもとうとする。そういった関わりを通じて、他の人々と関わることへの心地よさや楽しさを感じ、更に自ら周囲の人と関わりをもとうとするようになる。

またこの時期、同じものに興味を示した子ども同士の間には、ものを介したやり取りが生じたり、近くにいる子ども同士が同じ表情や動作をして、それを面白がって互いに顔を見合わせて笑ったりするなど、子どもが他の子どもと関わって楽しむ様子が見られる。このような場面は意図



せず生じることも多いが、こうした経験を重ねる中で、子どもは周囲の子どもに対する興味や関心を高め、自分から働きかけて関わろうとするようになっていく。

子ども同士の関わりにおいては、双方の思いがぶつかり合うこともあるが、そうした時に保育士等が自分の気持ちを温かく受け入れつつ援助してくれる態度を見ることで、子どもは徐々に自分と他者の気持ちの違いに気付くようになる。そういった経験を通じて、他の人々との生活に慣れていき、人と共に過ごしていくためのきまりがあることにも少しずつ気付くようになる。

## (イ) 内容

- |   |
|---|
| <p>① 保育士等や周囲の子ども等との安定した関係の中で、共に過ごす心地よさを感じる。</p> |
|---|

子どもは、自分を温かく受け入れてくれる保育士等との信頼関係に支えられて自分の居場所を確保し、安心感をもってやりたいことに取り組むようになる。保育士等は、子ども一人一人の内面に思いを寄せ、保育所の生活の何に心地よさを感じているのか理解しようとするのが大切である。

例えば、自分のクラスの保育士等や子ども等との関係の中で安定する子ども、職員室で施設長等と過ごすことで安定する子ども、兄弟姉妹等のそばにいて安定する子どもなど、子どもによって、誰と、どのように過ごすことで安定するかは異なる。それぞれに心地よさを感じられる相手との関係性を掘りどころに、保育所での生活に親しみをもつようになり、他の人とも関わりを広げていく。

子どもが、保育所の生活を通して、周囲の人と共に過ごす心地よさを感じるためには、まず保育士等がこうした子ども一人一人の状況をよく

捉え、その思いを受け入れながら関わっていくことが大切である。

**② 保育士等の受容的・応答的な関わりの中で、欲求を適切に満たし、安定感をもって過ごす。**

子どもは、生理的欲求、知的刺激や人との関わりに対する欲求など、様々な欲求をもって生活している。そして、それらが満たされることで充実感や満足感を味わい、自分なりにしたいことを見付け、そのことに取り組もうとする意欲をもつようになる。保育士等は、子どもが興味や関心をもったことに対して、自分なりに考えて自分の力でしてみようとする態度を育てることが大切である。

そのため、保育士等は、子ども一人一人の行動や思いをありのまま認め、期待をもって見守ることや、子ども一人一人の発達の違いを考慮した上で保育士等の考えや気持ちを表情や言葉などで伝える。こうした受容的・応答的な関わりを通して、子どもは自分の考えや思いが受け止められた喜びを感じると同時に、保育士等の思いに次第に気付くようになる。こういった体験を通して、自分で考えて自分でしようとする意欲や諦めずにやり遂げようとする気持ちの芽生えが培われる。

**③ 身の回りに様々な人がいることに気付き、徐々に他の子どもと関わりをもって遊ぶ。**

保育所は同年代の子どもが集団で共に過ごす生活の場であり、子どもが様々な人と出会う場である。子どもは、保育所における生活の中で、それぞれに異なる個性をもった他の子どもや保護者をはじめ、同じ地域に暮らす高齢者など多様な年代の人や障害のある人、外国人などと接す

る。

保育士等は、子どもがこれらの人と関わって様々に心を動かす時に、その出来事を通して感じたことや考えたことを共有し、それぞれの人の特性や多様性に気付くように関わって、人には皆違いがあるということを子どもが実体験として感じ取れるように支えることが重要である。

また、子どもは、遊びを通して自分とは異なる思いや感情をもつ他の子どもの存在に気付き、徐々に子ども同士の関わりをもつようになる。保育士等は、遊びの中で互いのよさなどが生かされ、一緒に遊ぶ楽しさをもてるよう、それぞれの友達のよいところを伝えるようにする。保育士等が、子ども一人一人のよさや可能性を見だし、その子どもらしさを損なわず、ありのままを受け入れる姿勢をもつことが大切である。

**④ 保育士等の仲立ちにより、他の子どもとの関わり方を少しずつ身につける。**

子どもは、幼い頃から他者の気持ちに共感したり、苦痛を示す相手を慰めたりする行動を示すことがある。しかし、自分と他者の気持ちの区別はできにくいため、他の子どもと関わりを深めていく中で、自己主張し合ったり、いざこざが起きたりすることも多くなる。

保育士等は、子ども一人一人が十分に自己を発揮しながら、保育所の生活における様々な場面で他の子どもと多様な関わりがもてるようにする。そして、子どもが他の子どもと一緒に生活する中で、自分の思いを相手に伝えることができるようにするとともに、相手にも思いがあることに気付くことができるように仲立ちすることが大切である。時には保育士等が具体的な関わり方の見本を実際に行ってみたり言ってみたりして示すことで、子どもが対人的な場面でその状況に応じた適切な行動や言い方があることに気付くようにする。

**⑤ 保育所の生活の仕方に慣れ、きまりがあることや、その大切さに気付く。**

子どもは、一人一人の家庭環境や生活経験が異なる中で、保育士等にありのままを受け止められ、認められつつ、保育所での生活の仕方に次第に慣れていく。保育士等は、子どもが日々の生活や遊びの中で楽しさを感じ、保育所での生活に充実感を得られるようにすることが必要である。子どもは保育所での充実した生活を過ごす中で、戸外に出る時に靴を履くことやトイレの使い方等を繰り返し経験しながら、きまりがあることに気付くようになる。

また、子どもは楽しい遊びをする中で他者との間に生じる葛藤などの体験を通じて、きまりの大切さを子どもなりに感じる。例えば、遊具を使って十分に遊び、楽しかったという経験を積み重ねると、その遊具へのこだわりや愛情をもつようになり、他の子どももそれを使いたい時に、その遊具を巡っていざこざが起きることがある。こういった時、保育士等は直ちにきまりを伝えたり、守らせたりするのではなく、まずは子どもの思いを十分に受け止め、相手の思いもあることに気付くようにする。このように、子どもが充実した生活や遊びの中で経験を積み重ねることで、自らきまりの大切さに気付くよう援助することが大切である。

**⑥ 生活や遊びの中で、年長児や保育士等の真似をしたり、ごっこ遊びを楽しんだりする。**

この時期の子どもは、能動的に身近な人の真似をする行動が見られる。保育所は、幅広い年齢の子どもが互いに関わり合いながら共に生活している。そういった環境の中で、周囲の身近な人への関心が高まると、年

長児や保育士等の仕草や行動の真似をすることがある。例えば、年長児との関わりの中で、憧れの気持ちを抱いて遊びの真似をしたり、自分が困っている時に保育士等が助けてくれたことを他の子どもに対して同じように行ったりすることがある。また、生活や遊びの中で経験したことを、ごっこ遊びで再現して楽しむ姿も見られるようになる。

このように、この時期の子どもは、年長児や保育士等の真似やごっこ遊びを通じて、保育所での生活の仕方に気付くことがある。保育士等は、子どもが他の年齢の子どもの存在を感じ、互いに関わりを楽しめるように援助することが大切である。

#### (ウ) 内容の取扱い

- |   |
|---|
| <p>① 保育士等との信頼関係に支えられて生活を確立するとともに、自分で何かをしようとする気持ちが旺盛になる時期であることに鑑み、そのような子どもの気持ちを尊重し、温かく見守るとともに、愛情豊かに、応答的に関わり、適切な援助を行うようにすること。</p> |
|---|

子どもの発達の状態や内面に即した適切な援助を行うためには、まず保育士等が子ども一人一人のよさを認めて信頼関係をつくり出すことが必要である。そのため、保育士等は、まだ言葉が十分でないことを理解し、子どもの何気ない仕草や表情から、感じていることや実現したいと思っていることをありのままに受け止めることが大切である。そして、子どもの気持ちを尊重し、期待をもって見守ることで、子どもが生活や遊びの様々な場面で、自分でしようとする気持ちをもつことができるよう援助する。

子どもが自分で何かをしようとする過程で、時にはどうしたらよいか分からず戸惑ったり、不安を覚えてためらったりすることもある。保育士等は、こうした子どもの揺れ動く心の動きに対して、共感的に心を動

かしたり、一緒に考えたりするなど、その時々で柔軟に応答することが大切である。保育士等のこのような援助によって、子どもは安心を得て自らやろうとする気持ちを旺盛にし、自立心の芽生えを育てていくのである。

② 思い通りにいかない場合等の子どもの不安定な感情の表出については、保育士等が受容的に受け止めるとともに、そうした気持ちから立ち直る経験や感情をコントロールすることへの気付き等につなげていけるように援助すること。

子どもは思い通りにいかない場合、悲しんだり、怒ったり、不安になったり、諦めたり、恥ずかしさを感じたりするなど、様々に不安定な感情を表出する。保育士等は、安易に気持ちの切り替えを促すのではなく、子どもの感情に対して「悲しいね」「悔しいね」などと十分に時間をかけて受容的に受け止めるとともに、子どもなりに取り組んでいる姿を認めたり、時には一緒に行動しながら励ましたりすることが大切である。

こうした援助によって、子どもは安心して自分の素直な感情を表出し、保育士等と共に自分の気持ちに向き合いながら、不安定な気持ちから立ち直るようになる。このように、子どもは、保育士等からの受容的な援助の下、自己を発揮しながら現実の状況と折り合いを付ける経験を重ねることで、自己肯定感を高めると同時に、自分の感情をコントロールすることへの気付きが生まれるのである。

③ この時期は自己と他者との違いの認識がまだ十分ではないことから、子どもの自我の育ちを見守るとともに、保育士等が仲立ちとなって、自分の気持ちを相手に伝えることや相手の気持ちに気付くことの大切さなど、友達の気持ちや友達との関わり方を丁寧に伝えていくこと。

この時期の子どもは、保育所での生活を重ねる中で、共に過ごす同年代の子どもの存在に興味を抱き、関わろうとし始める。そして、友達との関わりを深めていくことで、自分と他者の気持ちの違いに次第に気付くようになる。

保育士等は、子どもの自我の育ちを見守りつつ、友達の気持ちや友達との関わり方に気付いていくよう援助する。例えば、友達に自己主張をする中で互いの主張がぶつかり、手が出てしまったり、泣いて訴えたりしているような場合、それぞれの子どもの思いをしっかりと認め、受け止めた上で、相手が何を求めていたのか、何が嫌だったのかといったことを言葉にして伝え、仲立ちをする。

こうした関わりを丁寧に繰り返しながら、どうすればそれぞれの思いや願いが満たされて一緒に気持ちよく過ごせるのか考えてみるということに、子ども自身の気持ちが向くように援助していく。葛藤が生じた時に、保育士等がまず事態を収めることを優先した関わりをするのではなく、双方の思いを大切にしながら納得のいく解決の方法を提案してみるなど、状況に応じて具体的な対処の仕方を伝えていくことで、子ども自身はまだなかなか実行には移せなくても、自ら考えてみようとする気持ちを育てていくことが大切である。

## ウ 身近な環境との関わりに関する領域「環境」

周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。

(ア) ねらい

- ① 身近な環境に親しみ、触れ合う中で、様々なものに興味や関心をもつ。
- ② 様々なものに関わる中で、発見を楽しんだり、考えたりしようとする。
- ③ 見る、聞く、触るなどの経験を通して、感覚の働きを豊かにする。

行動範囲の拡大とともに、子どもが見たり触れたり感じたりするものは増えていく。保育士等や他の子どもなど生活や遊びの中で出会い、関わる様々な人を含め、子どもにとって、自分を取り巻く全てが成長や発達を促す環境である。身近なものに目を留め、飽きもせずじっと様子を眺めたり、納得のいくまで同じ動きを加えたりしながら、対象のもつ性質や動きの特徴、物と物の違いや関係性、仕組みなどを経験的に理解し、更に自ら新しい遊び方を発見することに面白さや喜びを見いだす。こうした姿は、好奇心をもって周囲の環境に関わり、自分なりにいろいろな方法や視点から探求して、生活や遊びに取り入れ自分のものとしていく力へとつながるものである。

この時期の子どもは、日頃から慣れ親しみ安心できる環境の中で、旺盛な探索意欲を発揮し、注意を引かれたものへ自ら近づいていく。身近なものの何気ない動きなどを一心に見つめ、手を伸ばしてその動きを止めたり変えたりしようとし、それによって生じる反応をまたじっと眺めたりする。音やにおい、衝撃、光など、自分と環境の関わり合いがもた



らすあらゆるものに感性を働かせ、その感覚を味わう。こうした経験を幾度も繰り返しながら、子どもは更に興味や関心の幅を広げていく。

このような子どもの発見や感動に周囲の大人が共感することで、子どもは自信をもって遊びを発展させていくことができる。保育士等は、安心してじっくりと興味の対象に関わることのできる環境を整え、子どもの見いだしたことや感じ取ったことに、思いの寄り添った言葉をかける。驚きや喜びを人と共有する経験は、子どもが期待をもって環境に関わり、発見を楽しんだり、更にいろいろと試行錯誤してみようとしたりする気持ちを支えるものとなる。

子どもが自ら感じ取る世界を豊かなものとしていくためには、直接的な経験を通して、様々な感覚を十分に働かせることが必要である。小さな音にも耳を澄ましたり、脆いものをそっと扱ったり、一方で思い切り木の枝を揺らして落ちてくる水滴の冷たさや感触を楽しんだり、体全体を使って環境に触れる経験を通して、子どもにとって身近な世界が魅力に満ちたものになっていく。

## (イ) 内容

- |   |
|---|
| <p>① 安全で活動しやすい環境での探索活動等を通して、見る、聞く、触れる、嗅ぐ、味わうなどの感覚の働きを豊かにする。</p> |
|---|

子どもの豊かな感覚や感性は、子どもの行動や手の届く範囲などを踏まえて安全や活動のしやすさに配慮された環境の下、安心できる保育士等の存在を拠りどころにして、活発な探索活動が促される中で培われていく。何か困ったことや怖いことがあった時には慰めたり助けたりしてくれる安全基地のような存在として信頼を寄せる保育士等が近くにいることによって、子どもの情緒は安定し、好奇心をもって周囲の人やものに関わってみようとする。周囲の様々な環境に興味や関心を広げ、見る、

聞く、触れる、嗅ぐ、味わうなど様々な感覚を働かせながら対象に関わる。行動範囲が広がるにつれて、目に入ってくるものに次々と興味を引かれ、身近な環境に対する興味が強くなっていく。

旺盛な好奇心を発揮して身近な環境に能動的に関わろうとする子どもの姿は、時には、しまっているものを全て取り出してしまったり、ものを放り投げたりするなど、大人にとっては困った行動のように映ることもある。保育士等は、子どもの活発な探索活動が豊かな感覚や感性を促していくことに留意し、安全で活動しやすい環境を整えるとともに、自らも感受性を豊かにし、子どもの思いを受け止めて丁寧に関わることが求められる。

② 玩具、絵本、遊具などに興味をもち、それらを使った遊びを楽しむ。

この時期の子どもは、手を巧みに使えるようになってくることで、例えば積み木を重ねて高くしたり、横に並べて四角く囲いを作ったりするなど、興味をもった玩具等を自分なりの目的や方法でいろいろと工夫しながら扱って楽しむ姿が見られる。さらに、成長に従ってそれらを塔に見立てたり、「ここが駅なの」と言いながら別の積み木を「電車が出発します」と床の上で動かしたりと、イメージを用いた遊びも盛んになる。

このように、心身の発達に支えられてものを使った遊びの幅が大きく広がりを見せる中で、子どもは身の回りに用意された玩具や絵本、遊具などに興味や関心をもち、いろいろなものに自分から触れ、それらで繰り返し遊ぶ。保育所や家庭、地域での日常生活において実際に経験したことと、玩具や遊具等で見立てたり絵本で読んだりしたイメージとを結び付け、自分なりの遊びの世界を豊かに広げていく。

また、他の子どもの遊んでいる様子や保育士等の「これは何のお店な

の」といった言葉などに触発され、それまでとは違う遊び方やイメージを取り入れて、遊びが発展していくこともある。後に、ものやイメージを介して人と一緒に遊ぶことへとつながっていく姿である。

**③ 身の回りの物に触れる中で、形、色、大きさ、量などの物の性質や仕組みに気付く。**

この時期の子どもは、身の回りで見付けた物を手にとり、ひっくり返していろいろな角度から眺めたり、壁や床に打ちついたり、足で踏みしめたりと、物と様々な関わり方をして遊ぶ。同じ形をしているが大きさの違う箱やカップを重ねてみたり、小さな玩具を色ごとに分けて並べたりして、物と物を組み合わせて楽しむ姿も見られる。こうした経験を重ねながら、形や色、持ってみた時の重みや硬さ、柔らかさ、ぶつけてみた時の音の大きさや響き方など、それぞれの違いを通して、物の様々な性質に気付いていく。

また、こうした遊びの中で偶発的に思いがけない動きを発見すると、それを繰り返しながら、「こうするとどうなるだろう」「どうしたらうまくいくだろう」「どうしてこうなるんだろう」など、物の関係や仕組みについての探究心が芽生える。例えば、凹凸のあるブロックを重ねようとした瞬間に形が崩れ、上にのせようとしたブロックが転がり落ちていく様子に興味向き、意図的に重ねては崩すことを繰り返すことで、崩すこと自体の面白さに気付いたり、崩れないようにバランスをとる積み方を見付け出したりするようになる。

保育士等は、予想される遊びに限定することなく、子どもの好奇心をもって遊ぶ姿を認め、豊かに遊びが展開されるよう共感的に関わるとともに、探求するための時間と空間を保障することが大切である。そのためには様々な遊具や用具、素材などを用意するとともに、衛生面や安全

面への配慮がなされた環境を整えることが大切である。

④ 自分の物と人の物の区別や、場所的感覚など、環境を捉える感覚が育つ。

この時期の子どもは、自我の芽生えとともに「自分の物」という所有の意識も明確になってくる。自分が先に遊んでいる玩具を他の子どもが持って行こうとすると取り返そうとしたり、外に出る時には自分の帽子や靴を自分で棚から持ってきたりする姿が見られる。同じように、他の子どもの持ち物も分かるようになってきて、友達のコップを取ってきて渡してあげたりする。

物だけでなく場所についても、愛着や親しみの気持ちを育てる。保育室にある自分のロッカーや椅子、自分のクラスの保育室など、保育所での生活における自分の拠点や居場所をもって、活動の範囲を広げていく。保育室内の食事や着替えをする場所、トイレや手を洗う場所など、日常の生活に関わる場所について、そこに何があるか、そこで何をするのかを把握し、生活の流れに合わせて行動する。遊びの場面でも、じっくり集中して玩具や絵本を楽しみたい時、園庭やテラス、廊下など空間の構成やそこにあるものを活用して遊びたい時など、自分のしたいことや今興味のあることをするのに適したお気に入りの場所を自分なりに見付けて、遊び込む姿がある。

このように自分が日々過ごす環境を、自分の活動と結び付けて捉える感覚が育っていく中で、子どもは主体的に自らの生活をつくり出していく。また、そこで保育士等が人やものに対して愛着をもって関わる姿に触れることで、自分も身近な人やものを大切にしようとする気持ちが芽生える。保育士等は、居心地のよさや「ここは自分の居場所である」という感覚を子どもがもつことができるよう、保育の環境を整えていくこ

とが必要である。

⑤ 身近な生き物に気付き、親しみをもつ。

子どもは、保育士等と共に身近な動植物を実際に見たり、触ったりすることを通して、それらに親しみや興味をもつ。手触り、重さ、大きさ、におい、動き、鳴き声などの様々な感覚を直接的に体験し、命をもつものの存在を実感する。姿かたちなどの特徴的な部分をはじめ、絵本や映像などを通して見知っていた生き物のイメージが、実物に触れることで更に鮮明になり、その生き物に対する認識が具体的で豊かなものになる。

初めて接する生き物に対して、最初はその扱い方などが分からず、いきなり触ろうとして逃げられてしまったり、相手から思いがけない反応が返ってきたりすることもある。それらは、生きた存在を相手にするからこそその経験である。

生き物との様々な触れ合いを重ねてそれぞれの特性が分かってくると、子どももそれに合わせた関わり方をするようになってくる。そして、こうした動植物の美しさや力強さ、はかなさ、可愛らしさなどに驚きや感動を味わい、心を動かされる。また、日常的に目にしたり、保育士等や年上の子どもたちが行う世話を手伝ったりしていく中で、慣れ親しんだ生き物に愛着を感じるようにもなっていく。

⑥ 近隣の生活や季節の行事などに興味や関心をもつ。

子どもは、家庭での生活や保育所での保育士等と保護者のやり取りな

ど、自分の日常の生活における様々な人の営みを見て、それらに興味や関心を示す。そして、様々な場面での大人の様子を観察し、そのイメージを取り込んで、口調や動作、行動を模倣したり、ままごとやお店屋さんごっこなどのごっこ遊びを楽しんだりする。これは、身近な生活のいろいろな場面における物事や人の行動を真似て、子どもが自らの知識として取り入れ、身に付けることができるようになりつつあることの現れである。この時期のこうした姿は、やがて自分の生活を支える家庭及び社会の仕組みや人々の働き、役割などを理解しようとする態度の育ちへとつながっていく。

また、子どもは、友達や保育士等と共に季節や折々の文化、行事に触れて、その雰囲気を楽しんだり、楽しんだりする。行事に合わせて彩りの添えられた保育室の飾りや食事、わくわくするような活動、少しだけ改まって特別感を味わう体験など、普段の生活とは違う環境の中で、子どもなりに保育士等や友達との一体感、季節や自身の成長の節目などを感じる。こうした経験を通して、子どもは日常の遊びにも自分の体験したことを取り入れたりしながら、自分を取り巻く地域の自然や伝統文化などに興味を向けるようになってくる。

保育においては子どもが季節の変化を感じ取ることができるようにするとともに、保育士等が季節感を取り入れた生活を楽しむ取組が求められる。また、子どもが季節の行事などに興味をもって発する言葉に共感し、適切に働きかけていくことが大切である。

### (ウ) 内容の取扱い

- |  |
|--|
| <p>① 玩具などは、音質、形、色、大きさなど子どもの発達状態に応じて適切なものを選び、遊びを通して感覚の発達が促されるように工夫すること。</p> |
|--|

子どもにとっての玩具は、乳児期から育ちつつある豊かな感性を養うものである。子どもは、自分なりに興味のある玩具を集め、遊び込むことでその玩具のもつ面白さを理解していくものである。例えば、積み木遊びの初期では、保育士等が積んだ積み木を崩したり、積んでもらったりする遊びを楽しむことから、徐々に自分で積み木を積んだり崩したり、並べたりを繰り返して楽しむようになる。手や指先の力を調整し、そつと置いたり力強く押し込んだりすることは、子どもの身体的機能の発達を促すことにもつながる。

こうしたことを踏まえて、子どもが自分なりの発想や工夫で楽しむことができるよう、子どもの発達の状態に即した形や大きさの玩具等を用意する。また、音の出る玩具の場合はその音質や音量が子どもにとって心地よいと思われるものであること、色についても、色合いなどに配慮したものを選ぶことが大切である。

この時期における一人一人の子どもの発達や興味、関心について、現状を把握するとともに見通しをもち、その玩具を通して子どもの今育ちつつある力が十分に発揮されるような玩具を選ぶようにすることが求められる。

② 身近な生き物との関わりについては、子どもが命を感じ、生命の尊さに気付く経験へとつながるものであることから、そうした気付きを促すような関わりとなるようにすること。

この時期、行動範囲が広がり、屋外での活動も活発となる。園庭や保育所外へ散歩に出かけ、そこで様々な生き物に出会い、その姿に興味や関心を抱く。例えば、草花、小枝、実などを見付けて集めてみたり、アリの行列を見付けて忙しく動き回る姿をじっと見入ったりする。また、ダンゴムシを触ってみて、その瞬間的な形状の変化に驚くようなことも

ある。このように身近な生き物に対する「見たい、触りたい」という欲求から、更に「その生き物のことをもっと知りたい」という好奇心へと高まっていく。

しかし、まだどのように扱ってよいか分からず、乱暴な扱いをしてしまうこともある。こうした場面で、保育士等は、子どもが生命の尊さに触れる機会と捉え、根気強く丁寧に対応することが求められる。そのためには、保育士等自身が生命に対する畏敬の念をもち、身近にいる様々なものの生きる姿を尊重する姿勢を示すことが重要である。

保育士等は、子どもが好奇心から思わず身を乗り出し、手を伸ばしたくなるような園庭や保育室などの自然環境を整備したり、散策したりするなどして、日常の生活の中で子どもが身近な生き物と触れ合う機会をもつようにすることが大切である。その際、身近な生き物に触れた後に、手洗いをするなど衛生面に留意する。その上で、身近な生き物やそれに関連する教材などを通して、生きているものに対する温かな感情が子どもの中に芽生えるよう、生き物との関わり方を具体的・実践的に伝えていく。

③ 地域の生活や季節の行事などに触れる際には、社会とのつながりや地域社会の文化への気付きにつながるものとなることが望ましいこと。その際、保育所内外の行事や地域の人々との触れ合いなどを通して行うこと等も考慮すること。

子どもは、その地域のつながりの中で育っていくものである。保育所周辺の散策中に会った近隣の住民から声をかけられ言葉を交わしたり、商店にあるものを見せてもらったりと、家庭での生活ではあまり得られない、地域に暮らす人と触れ合って受け入れられる経験を通して、地域の様々な世代や立場の人の存在を知る。



また、毎日の保育の中でも、わらべうたや昔話などを通してその季節や文化を取り入れた遊びを楽しんだり、行事食を体験したりすることで、伝統的な文化に触れるきっかけを得る。年長の子どもたちのお祭りごっこなどを見たり、参加したりすることも、行事に親しみをもつ機会となる。

保育士等は、その地域の伝統的な生活習慣を子どもと一緒に楽しむなど、地域の文化に子どもが親しむ体験をもつことができるようにしていくことが大切である。保育所が子どもと地域をつなぐ存在となり、子どもが地域に見守られながら育つ喜びを味わえるよう、子どもなりに楽しんだり取り組めたりするような体験を計画することが求められる。

保育士等は、自らがその地域の生活に触れたり文化の由来に関心をもったりして、地域の人々と積極的に関わりをもつようにすることが重要である。保育士等がその地域に愛着をもって関わろうとする態度をもつことで、保育所と地域の交流の機会が生まれ、子どもが地域に受け入れられていく。

## 工 言葉の獲得に関する領域「言葉」

経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。

(ア) ねらい

- ① 言葉遊びや言葉で表現する楽しさを感じる。
- ② 人の言葉や話などを聞き、自分でも思ったことを伝えようとする。
- ③ 絵本や物語等に親しむとともに、言葉のやり取りを通じて身近な人と気持ちを通わせる。

言葉を使うためには、他者と感情や物事を分かち合える温かな関係を基盤として、指し示す対象と言葉との対応に気付き、理解することと、それを相手に伝えようとする気持ちが育つことが必要である。意思をもつ主体としての自我の育ちと、自分の思いを分かち合いたい、共有したいと願う身近な大人との関係の育ちを土台に、言葉を用いて他者と伝え合う力が培われていく。

そうした発達を支えていく上で、この時期は、言葉のもつ響きやリズムの面白さや美しさ、言葉を交わすことの楽しさなどを感じ取り、十分に味わえるようにしていくことが重要である。保育士等は、絵本や詩、歌など、子どもが興味や関心をもって言葉に親しむことのできる環境を整えるとともに、子どもに対して、日常の挨拶をはじめとして生活や遊びの中で丁寧に温かく言葉をかけながら関わるよう心がける。また、子どもが表情や言葉などで表した気持ちを丁寧に受け止め、応えていくことが大切である。その際、保育士等の表情、声色、身振りなども、言葉と一体となり、重要な役割を果たす。そうした豊かな言葉の世界に触れ

る経験や、保育士等の温かい語りかけに心地よさや嬉しさを感じる経験を通して、子どもは大人の言うことを模倣したり、耳にした言葉を遊びの中に取り込んだりして、自分も言葉を使うことを楽しむ。

保育士等が子どもの発する言葉に耳を傾け、応答的なやり取りを重ねていくことは、子どもが自分の気持ちを伝えようとする意欲を育むことにつながる。また、保育士等の話や言葉に面白さや魅力を感じたり、保育士等の仲立ちを通して友達とのやり取りを楽しんだりすることを通して、保育士等や友達の言うことを分かりたいという気持ちも膨らむ。このように、日々の生活や遊びにおいて人との関わりが充実する中で、子どもの話すこと、聞くことへの意欲が高まっていく。

また、子どもは、絵本や物語などに登場する事物や話の展開、言葉の響きなどを保育士等と一緒に楽しんだり、ごっこ遊びなどの中で保育士等と言葉のやり取りをしたりする経験を通して、言葉の意味するものや話されたことの内容を徐々に理解するようになり、言葉で伝え合うことの喜びや言葉により心を通わせる楽しさを味わう。こうした経験を積み重ねることによって、様々な語彙や表現に出会い、言葉を話したり、相手の言うことを聞いたりする態度が育まれるのである。

## (イ) 内容

- |  |
|--|
| <p>① 保育士等の応答的な関わりや話しかけにより、自ら言葉を使おうとする。</p> |
|--|

子どもの言葉は、自分の欲求や気持ちを伝えたいと思い、かつ分かってもらえると感じられる、信頼できる人の存在があって初めて生まれる。子どもは、応答的な大人との関わりによって、自ら相手に呼びかけたり、承諾や拒否を表す片言や一語文を話したり、言葉で言い表せないことは指差しや身振りなどで示したりして、親しい大人に自分の欲求や気持ち

を伝えようとする。

保育士等は、言葉を獲得する前の子どもの表情や姿をよく観察し、その場面に適した言葉をかけたり、子どもの発声を真似たりしながら、声や身振りを介した関わりを楽しいものにしていくことが必要である。こうした応答的な関わりが、子どもと保育士等の関係を深め、言葉によるやり取りの基礎にもなる。また、子どもは保育士等の声や言葉をよく聞き、口元や表情をじっと見て、適切な発音への準備をしていく。そうして、子どもは、信頼できる相手に伝えたい、分かってもらいたいという気持ちの下に、自分も言葉を使おうとするのである。

## ② 生活に必要な簡単な言葉に気付き、聞き分ける。

子どもは、保育所での集団生活を送る中で、様々な生活に必要な言葉に出会う。例えば「マンマ」や「ネンネ」など、生活習慣や慣れ親しんだ活動内容を表す言葉がある。これらの言葉に気付くことは、生活に見通しをもち、安定感をもって過ごすことにつながる。また「はい」といった返事や、「かして」「ちょうだい」などの要求語、「どうぞ」「ありがとう」など、人と一緒に気持ちよく生活するために必要となる言葉もある。こうした言葉への気付きは、人との関わりを促し、互いに心を通わせることにつながる。

「バイバイ」と手を振るなど、生活に密着した身振りを伴う言葉は、子どもが身近な人と一緒に過ごす中で、自らも相手に合わせて体を動かしながら、比較的早い時期に獲得されていく。一方、「散歩」「着替える」などのように、毎日の同じ生活場面で繰り返し耳にすることで、次第に気付くようになる言葉もある。保育士等は、子どもが生活の中で日常使う言葉を十分に理解できるように、その意味するところを場面をと

らえて丁寧に伝えるとともに、それらの言葉に親しみ、言葉によって人との関わりが豊かになる経験ができるよう援助していくことが大切である。

**③ 親しみをもって日常の挨拶に応じる。**

保育所で日常的に交わされる挨拶には、朝の挨拶や、帰りの挨拶、食事の時の挨拶、物を借りたり、何かをしてもらったりした時の御礼の挨拶などがある。挨拶を交わすことは、相手と心を通わせることであり、喜びや楽しみ、感謝の気持ちなどを伝え合うことでもある。また、挨拶を交わすことによって、互いの親しみが増し、共に過ごす生活が心地よいものにもなる。

子どもは、保育士等や友達と共に生活する中で、同じ場面で繰り返し聞く挨拶の言葉を理解するようになる。毎日の生活の中で、温かく安心できる雰囲気の中で交わされる、明るく親しみを込めた挨拶に、自分も応じようとするようになる。

保育士等は、子どもが言葉を交わしたくなるような信頼関係を築くとともに、子どもが挨拶の心地よさを感じたり、挨拶に応じたくなったりするような、明るく和やかな雰囲気となるよう心がけることが重要である。同時に、保育士等が、日常的に自ら率先して子どもや保護者を含めた周囲の人に挨拶をしている姿を示すことも大切である。

**④ 絵本や紙芝居を楽しみ、簡単な言葉を繰り返したり、模倣をしたりして遊ぶ。**

絵本や紙芝居は、子どもに新たな言葉との出会いをつくり、言葉の感覚や語彙を豊かにするとともに、子どものイメージの世界を広げる。この時期の子どもは、言葉の意味を理解して楽しむというよりも、言葉そのものの音やリズムの響きがもつ面白さを繰り返し楽しむことが多い。気に入った絵本や紙芝居は、保育士等に何度でも繰り返し読んでもらうことを求め、そこに出てくる簡単な言葉を自分から口ずさむようになる。読んでもらって耳にした言葉を自分の中に取り込み、自分もその言葉を使うことを楽しむようになるのである。

繰り返し読んでもらうことで、子どもは登場人物の真似をしたり、身体で表現したりして遊ぶようになる。例えば、「ぴょん ぴょん」と言いながらカエルの真似をして跳んだり、「三びきのこぶた」をイメージし子どもたちが子ブタになって逃げ出し、保育士等がオオカミになって追いかけたりして、ごっこ遊びを楽しむこともある。このように、友達と一緒に絵本や紙芝居のイメージをもって、ごっこ遊びを共に楽しむ経験は、子ども同士の心を通い合わせることにもつながる。

**⑤ 保育士等とごっこ遊びをする中で、言葉のやり取りを楽しむ。**

子どもは、自分の体を使って身の回りのものに関わる中で、様々なものや場面へのイメージを膨らませ、そのイメージしたものを遊具などで見立てて遊ぶようになる。また、保育士等や友達のしぐさを真似たりする中で、簡単なごっこ遊びを楽しむようになり、保育士等と簡単な言葉を交わしたり、やり取りを重ねたりするようになる。

ごっこ遊びの場面で、保育士等が挨拶を交わしたり、返事をしたり、擬音語や擬態語を口にしたり、場面や役に合わせた言葉を話したりすることは、子どもの言葉に対する感覚や語彙を豊かにする。また、子ども

が「だったらいいな」という憧れの世界を思い描き、ふりやなりきることを楽しみながら、自らこうした言葉を使おうとする意欲を高める。

実際に目の前にはない場面や事物を頭の中でイメージして、遊具などを別のものに見立てたり、何かのふりをしたりするという象徴機能の発達は、言葉の習得と重要な関わりがある。子どもは、ごっこ遊びの中で、思いを言葉で表現し、言葉を交わすことの楽しさを味わう。布や箱のような様々なものに見立てられる素材や、エプロンやままごとの遊具などのイメージを支える小道具などを用意したり、保育士等も子どもと一緒に遊び込んだりしながら、子どもが膨らませたイメージに応答的に関わり、広げていく援助が大切である。

**⑥ 保育士等を仲立ちとして、生活や遊びの中で友達との言葉のやり取りを楽しむ。**

この時期の子どもは、保育士等を仲立ちにして、次第に子ども同士の関わりを楽しむようになる。年齢や月齢が近い子どもたちは、共通のものに興味をもったり心地よさを感じたりすることが多い。例えば、丸くなったダンゴムシを、数人でじっと見つめたり、手のひらにのせて保育士等に見せた後、違う友達にも見せたりするなど、同じ興味の対象を介して友達との関わりが広がる時期である。保育士等は「ダンゴムシさん、丸くなってるね。お昼寝しているのかな。」など、子どもの気持ちを代弁したり、更にやり取りが引き出されるような応答をしたりして、他の子どもとの仲立ちをすることが大切である。そうすることで、子どもたちは言葉で思いをやり取りする喜びを経験する。

また、子どもたちは、友達と同じことをすることを喜び、互いの動きを模倣し合うことも楽しむようになる。「〇〇くんの電車が来るよ。ガタンゴトン、ガタンゴトン。」などと保育士等が言葉をかけることで、

他の子どもたちも「ガタンゴトン、ガタンゴトン」と電車になり、皆で一緒に電車ごっこを楽しむこともある。このように、保育士等の言葉が、子どもの言葉を生み、遊びの楽しさを広げるのである。

⑦ 保育士等や友達という言葉や話に興味や関心をもって、聞いたり、話したりする。

保育士等に名前を呼んでもらったり、友達同士で名前を呼び合ったり、子どもにとって人と言葉を交わすことは楽しく嬉しい経験であることが大切である。こうした楽しさや嬉しさを味わうには、保育士等や友達との間に安心して話せるような雰囲気があることや、言葉を交わす相手への安心感と信頼感が必要である。この信頼関係を基盤として、子どもは、保育士等や友達の話す言葉に興味や関心をもち、自分の思ったことや感じたことを言葉に表し、言葉のやり取りを楽しむようになる。

保育士等は、子どもが安心して自分を表現することができるよう、温かな雰囲気でもの気持ちを受け止める必要がある。子どもの言葉がたどたどしかったり、発音や発声が不明瞭であったりしても、まず何よりも子どもが自ら話そうとする意欲を見守りながら、親しみをもって接する。その上で、温かなまなざしでもの視線を合わせて、子どもの話にゆったりと耳を傾け、受容的に応じるようにすることが大切である。

#### (ウ) 内容の取扱い

① 身近な人に親しみをもって接し、自分の感情などを伝え、それに相手が応答し、その言葉を聞くことを通して、次第に言葉が獲得されていくものであることを考慮して、楽しい雰囲気の中で保育士等との言葉のやり取りができるようにすること。



初めて意味のある言葉を発するようになる時期にはかなり個人差があるものの、1歳以上3歳未満の時期は、少しずつ言葉が出始め、増えていく時期である。この頃の子どもの言葉は一語文と言われるように、一語の中に様々な思いが込められている。例えば「マンマ」という言葉は、母親などへの呼びかけであるとともに、「マンマ食べたい」という欲求を表す場合もある。保育士等は、一語に込められた子どもの思いを丁寧に汲み取り、伝えたい、聞いてもらいたいという子どもの思いに応えて、「お腹空いたね。マンマ食べようね。」など、言葉を補って返していくことが重要である。そうすることによって、子どもは、言葉で思いが通じ合う喜びを感じ、伝えたい、聞いてもらいたいと表現する意欲を高めていくのである。

こうした一語文での関わりを重ねる中で、子どもは「マンマ欲しい」などの二語文を獲得していく。話したい気持ちはあっても、まだはっきりと言葉にするのは難しい時期である。保育士等は、急かさず、ゆっくりと子どもの話を聞き、「いっぱい遊んだから、お腹空いたね。おいしいごはん、食べようね。」など、状況を説明する言葉などを補って、子どもに返していくようにする。言葉は気持ちや思いを伝えるものである。言葉の奥にある子どもの思いを汲み取って、保育士等の思いを込めた言葉を、子どもに返すことが大切である。

② 子どもが自分の思いを言葉で伝えるとともに、他の子どもの話などを聞くことを通して、次第に話を理解し、言葉による伝え合いができるようになるよう、気持ちや経験等の言語化を行うことを援助するなど、子ども同士の関わりの中立ちを行うようにすること。

言葉を獲得し始め、自我が芽生える時期の子どもは、自他の区別が明確に付くようになり、友達や周囲の人への関心も高まる。しかし、まだ

相手の気持ちに気付けなかったり、所有の意識が不確かだったりする場面も多いため、他の子どもが使っている、目に留まり興味をもった物にはさっと手を伸ばし、物の取り合いになることもある。

こうした時は、「取り合いはだめ」「貸してあげなさい」などと単に行動を制止したり望ましい行動を指示したりして子どもの思いを抑えるのではなく、まずは双方が思いや感情を出し合う様子を見守り、解決が難しいようであれば、保育士等が互いの思いを伝え合う仲立ちをすることが大切である。「どうしたの?」「二人とも困ったね」と子どもたちの思いを察しつつ、それを聞き出しながら、物を取られた子どもに対しては「遊んでいたのを取られて、悲しかったね。まだ使いたかったよね。」と子どもの気持ちに共感し、「でも、〇〇ちゃんもこれが欲しいんだって」と相手の思いを伝える。物を取った子どもに対しても「楽しそうだったから、〇〇ちゃんも欲しくなったんだね」と共感し受け止めた後、「でも今は、△△ちゃんが使ってたんだって。急に取られて、悲しかったんだって。」と相手の思いを伝えたり、「貸してほしい時は『貸して』って言おうね」「急に取ったらびっくりして、悲しくなっちゃうんだよ」と、言葉で思いを伝えたりする大切さを知らせていくことが必要である。

このように、保育士等が子どもの気持ちや思い、経験等を言葉にして、双方に伝えていくことが大切である。自分の主張を受け止めてもらい、相手にも思いがあることを受け止める経験を丁寧に積み重ねていくことで、子どもの自我が育つ。また、友達にも思いがあることに気づき、自分の思いを伝えるだけではなく、相手の思いも聞こうとするようになり、言葉による気持ちの伝え合いが芽生えるのである。

③ この時期は、片言から、二語文、ごっこ遊びでのやり取りができる程度へと、大きく言葉の習得が進む時期であることから、それぞれの子どもの発達状況に応じて、遊びや関わりの工夫など、保育の内容を適切に展開することが必要であること。

片言を話し始める時期、子どもの一言には、いろいろな思いが込められている。子どもは、事実を伝えるだけではなく、信頼できる保育士等に自分の思いを共有してもらいたいと思って言葉を発する。「ワンワン」という一言にも「犬がいた」という事実だけではなく、「かわいい」「大きい」など、犬を見た時の子どもの思いや驚きが込められている。「ほんとだね。ワンワン、白い毛がふわふわしていて、かわいいね。」などと言葉を補いながら伝え、言葉をやり取りする喜びを感じられるようにすることが大切である。

象徴機能が発達し、イメージする力が育って、単語数も増加してくると、子どもは「ワンワン、イタ」「ワンワン、ネンネ」など、二語文を話し始める。たった二語ではあるが、単語を組み合わせることによって、子どもは様々な思いを言葉で表現できるようになる。また「コレ、ナーニ？」などと、盛んにものの名前を尋ねるようになる。言葉で周りの世界を捉え始めるのである。この時期、子どもと一緒に絵本を開けば、子どもが犬の絵を指差しながら「ワンワン」と言ったり、象の絵を指差しながら「コレ、ナーニ？」と尋ねたりする。「ワンワンだね。しっぽ、フリフリしているね。」「象さんだね。お鼻が長いね。」と、子どもの言葉に、保育士等が丁寧に言葉を補いながら返すことで、子どもの言葉は豊かになり、言葉で捉える世界も広がる。

体験した出来事や、絵本などの物語を記憶し、それをイメージとして再現できるようになると、子どもは、ごっこ遊びを盛んに楽しむようになる。生活の中で身近な大人がすることに興味をもち、自分でもやって

みたくなる。例えば、バスの運転手さんになるなど、現実の生活ではできないことをイメージの中で体験できるようなごっこ遊びを楽しむようになる。段ボール箱で作ったバスや、車掌さんの帽子など、イメージを支える小道具を準備し、保育士等も一緒に遊びに入り、「発車しまーす」「次は、ドングリ公園です」などとモデルになって、言葉のやり取りをして見せることで、子どももよりイメージをもちやすくなる。また、子どもの言葉に対しても、丁寧に受け止め、返していくことで、子どもは言葉を使って遊ぶことの楽しさを感じ、保育士等の言葉を自分も真似て使ってみたりしながら、言葉を豊かにしていく。

## 才 感性と表現に関する領域「表現」

感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。

(ア) ねらい

- ① 身体の諸感覚の経験を豊かにし、様々な感覚を味わう。
- ② 感じたことや考えたことなどを自分なりに表現しようとする。
- ③ 生活や遊びの様々な体験を通して、イメージや感性が豊かになる。

子どもは、環境に関わりながら身近にある様々な人や物、自然の事象などについて感じ取ったことを基に、それらのイメージを自分の中につくっていく。そうしたイメージを蓄積していくことで、目の前にない物も別の物で見立てたり、大人の行動を後で真似て場面や状況を再現したりすることができるようになる。心の中にあるイメージを、自分なりに表現しようとするようになるのである。このように身近な環境と関わり、感じ取り、イメージを形成する力が、表現する力や創造性の発達の基礎となる。

この時期は、歩行の開始に伴い、自分で移動できる範囲が広がり、手を使って様々なものを扱うこともできるようになる。乳児期よりも更に多様なものに出会い、触れ合うことで、形や色、音、感触、香りなど、それぞれがもつ性質や特徴を様々な感覚によって捉えるようになる。このように自分の身体を通した経験を豊かに重ねていくことが、諸感覚の発達を促し、子どもの世界を広げていくことになる。

また、例えば、園庭で見慣れない虫を発見して、おそるおそる近づいてみたところ急に動き出してびっくりしたというような場面で、保育士等がタイミングよく声をかけると、子どもは自らの知っていることに照

らしてイメージを膨らませながら、一緒にいた友達とそれぞれに感じたことを表現して保育士等に伝えようとする。このように子どもが感じ取ったことを保育士等が共感をもって受け止め、子どもがどのように捉えたかということに興味や関心を示して関わることで、子どもは自分の思いを表現して伝えることへの意欲を高める。

子どもが環境と関わり様々な感覚を味わう際に、保育士等もその感覚と一緒に楽しんだり、「真っ白で、雪みたいだね」などと感覚とイメージを結ぶ言葉を添えたり、「こっちの砂は、サラサラだね」と気づきを促したりすることで、子どものイメージは更に膨らみ、感性も豊かになっていく。このように、子どもの感性や表現力は、保育士等が自身の感性によって捉え、表現したことを取り入れながら育まれていく。保育士等自身が感性を豊かにもち、共感をもって子どもの気づきを受け止めていくことが大切である。

## (イ) 内容

### ① 水、砂、土、紙、粘土など様々な素材に触れて楽しむ。

子どもは、水の冷たさや砂のざらざら感、泥のぬめりなど、水や土といった様々な素材に触れて、全身でその感触を楽しむ。こうした感触を十分に味わい、諸感覚を働かせていくことが、子どもの感性を育む。

子どもが何かに触れている時、その対象と、触れている子ども自身の体と心と、さらにはそれらを取り巻いている環境全体とは、それぞれが互いに結び付いて一つの経験となっている。例えば、水の冷たさは暑い夏には心地よく、寒い冬には避けたいものとして感じられる。同じ温度の水でも、手を浸して涼しさを味わい、気持ちが安らぐこともあれば、触れた瞬間に思わず身をすくめてしまうこともある。あるいは、同じ土でも、湿り具合によってしっとり柔らかかったり、ぬるぬるしていて手からしたたり落ちたりと、その感触や性質は様々な条件によって異なるものとなる。そしてそれを、時には気持ちよいと感じ、またある時には汚れて困ると感じる。身近にある様々なものを自分の体と心の両方で感じ取る経験を一つ一つ重ねて、子どもは自分を取り巻いている世界を自分のものとしていく。

触れるということは、この時期の子どもにとって、周囲の環境と関わり外界を知るための重要な手段である。そのため、子どもは「触って確かめる」ことを盛んにする。乳児期からしばらくの間はものを口に入れるなどなめて触れることが多く、その後は手指や体全体を使って確かめることが中心になってくる。様々な状態の様々な素材に自らの体で直接触れ、そのものの感触などを十分に味わい、楽しむ経験を通して、子どもは自らの感覚や感性を豊かにしていくのである。

## ② 音楽、リズムやそれに合わせた体の動きを楽しむ。

この時期の子どもは、自分の体を思うように動かすことができるようになり、心地よい音楽や楽しいリズムを耳にすると、その調子や自分の楽しい気持ちに合わせて、思い思いに体を揺らしたり飛び跳ねたり、手や足で自分もリズムをとろうとするようになる。また、保育士等が音楽やリズムに合わせて歌いながら、手や足を伸ばしたり体を左右に揺らしたりすると、その様子を見ながら、自分も一緒に歌ったり、動きを真似ようとしたりする。年上の子どもたちが音楽やリズムに合わせて楽しそうに踊っている姿をじっと見ているうちに、思わず自分の体も動いているといったこともある。

音楽やリズムに合わせて体を動かすという経験を通して、子どもは、楽しい気持ちをこうした方法で表現することの喜びを味わう。また、保育士等や友達など身近な他者と一緒に楽しむ中で、同じリズムで体を動かしているうちに自ずと心が共鳴し、一体感を味わうことの喜びも感じるようになる。高揚感や充実感、安心感や穏やかで優しい気持ちなど、音楽やリズムの多様性ととともに、子どもの味わう感情も様々である。何となく寂しさを感じていたり、少し嫌なことがあって気持ちがふさいだりしている時に、音楽によって気持ちが自然と切り替わり、また遊びへと気持ちが向かうきっかけになるようなこともある。子どもが、自分の思いや体の動きと音楽やリズムのつながりを、心から楽しむ経験を重ねることが重要である。



③ 生活の中で様々な音、形、色、手触り、動き、味、香りなどに気付いたり、感じたりして楽しむ。

子どもは生活の中で、風が木々を揺らす音や雨粒が傘に当たる音、摘んだ花の色合いや香り、拾った葉の形、土や砂の手触り、地面をはう小さな虫の動き、食事の味や香りなど、身の回りにある様々な音や形、色などに気付く。そして、その心地よさを感じたり、面白さや不思議さ、美しさなどに心を動かされたりする。聴覚や嗅覚など、外界を知覚するための感覚は、誕生の時点である程度発達した状態にあるが、その後、実際に外界と関わる経験を通して、それらはより発達していく。

赤く色付いた葉を拾って、「見て見て」と保育士等や友達のもとへ持ってくるなど、この時期の子どもは、感じ取ったことや心を動かされたことを、身近な人と一緒に楽しんだり、伝え合ったりするようになる。「きれいね。真っ赤だね。」などと保育士等が子どもの発見や感動を受け止め、「どこで見つけたの？ 私も探してみよう。」と一緒に集めるなど、共感的に関わることで、子どもは喜びや自信を得て、もっとたくさん落ち葉を集めようとしたり、他の場所でも違う形や色の葉を見付けようとしたりする。

このように、日常の生活で身体感覚を伴う様々な体験を積み重ねる中で、子どもはその性質や不思議さ、面白さに気づき、更に興味を膨らませる。また、それらの体験を身近な人と共有しながら、情緒を安定させたり、生活を楽しんだり、遊びに取り入れたりしていく。

保育士等は、身近な環境に関わって、直接聞いたり、見たり、触れたり、味わったり、嗅いだりする子どもの感覚に心を傾け、子どもの感動や発見に寄り添いながら、子どもの感性が豊かに育つよう働きかけていく。

**④ 歌を歌ったり、簡単な手遊びや全身を使う遊びを楽しんだりする。**

子どもは、保育士等の歌うわらべうたなどの耳になじみやすい音の響きやゆったりとした調べに安らぎを感じる。また簡単な手遊びなどを通して、保育士等とのやり取りを楽しむ。こうした経験を日常的に繰り返しながら、歌や手遊び等に慣れ親しみ、興味をもつようになる中で、子どもも保育士等の歌や動きに合わせて体を動かしたり、一緒に歌おうとしたりする。そして、自然と歌や動作などを覚えて、心が解放されている時や、絵本や散歩で見かけた風景や動物などが歌のイメージと重なっている時に、自ら口ずさむこともある。そうした姿を保育士等が温かく受け止め、子どもの感じている楽しさを共有することで、子どもは歌を通して心が通い合う喜びを感じ、更に自分の思いを表現したいという気持ちをもつようになっていく。

保育士等が子どもにとって安心の得られる心の拠りどころとなることで、子どもは今持ち合わせている力を十分に発揮して遊ぶ。この時期、歌うことに親しみ、また歌に合わせてよく体や手指を動かすことで、楽しみながらそれらを自分のものとして身に付けていく。同時に、保育所や保育室が子どもにとって更に安心して自分を表現できる場所となる。

**⑤ 保育士等からの話や、生活や遊びの中での出来事を通して、イメージを豊かにする。**

保育所において、毎日同じように繰り返される活動などを、楽しく充実した時間として経験していると、保育士等の動きから、子どもはその先をイメージして行動する。例えば、おやつ時間に保育士等がテーブル

ルを出すなど準備をする姿を見て、子どもは、何も言われなくても自ら椅子を出すのを手伝ったり、手を洗いに行こうとしたりする。遊びの中でも、玩具などをおやつに見立てて、保育士等が普段しているのと同じように「はい、どうぞ」と皿にのせたりする。また、保育士等を仲立ちとして友達と一緒に楽しく遊ぶ経験を積み重ねると、後日、その楽しく遊んだ場面で使った遊具を見つけた時に、その遊びを再現しようと保育士等を誘うなどするようになる。

経験した出来事を記憶する力やイメージする力の育ちは、この時期の子どもの生活や遊びを豊かなものにする。そして、充実した生活や遊びの中で周囲に注意を向け、子どもなりに観察したり、大人が話していることを聞いたりして、自分の中にそれらを取り込んでいく。新たに得た様々な情報や印象に残った出来事などから、イメージする力もまた更に豊かになっていく。

イメージする力が育ってくると、この時期の言葉の育ちにも支えられて、保育士等に簡単なストーリーの絵本を読んでもらいながら、現実の世界を絵本の中に見いだしたり、絵本の世界を現実の世界で再現したりもし始める。また、繰り返しのパターンなどから話の展開をある程度予測し、先を楽しみにしながら聞くといった姿も見られるようになる。

**⑥ 生活や遊びの中で、興味のあることや経験したことなどを自分なりに表現する。**

この時期は、身近に経験した出来事や日常生活の中で興味のあるものなどを題材にして遊ぶ姿が見られる。保育室の一角で「ここはお風呂です」と保育士等に声をかけられると、髪や体を洗うような動作をしたり、人形やぬいぐるみに布をかけて優しく寝かしつけたりと、見立てやふりを保育士等と楽しむ。

また、クレヨンなどを手にして、思いのままに画用紙になぐりがきをして遊ぶこともある。最初のうちはクレヨンを握って手を動かすことや紙にその跡が残ること自体が面白い様子だが、やがてクレヨンの持ち方や手首の動かし方などに慣れてきて、かく時の筆圧が安定し線になめらかさが出てくる。この時期はかいた線や点がまとまった形にはなっておらず、何かを意図してかいたようには見えないが、後で「これは？」と聞くと「ママ」と答えたりすることもある。また、経験した出来事の思い出と結び付けて「ぺったん、ぺったん、おもちつき」とつぶやきながら点を打ったりする。子どもなりに、かくという行為やかいたものに、意味が伴い始めている姿といえる。

保育士等は、こうした子どもの表現する世界と一緒に楽しみながら、そのイメージを広げるような関わりをすることで、更にその表現が豊かになっていくよう援助する。また、それぞれの子どもの表現する世界を大切にしながら、保育士等が仲立ちし子ども同士の世界をつなげることで、それらが共有され、ごっこ遊びなど友達とイメージを共有した遊びへと発展していく。

### (ウ) 内容の取扱い

- |   |
|---|
| <p>① 子どもの表現は、遊びや生活の様々な場面で表出されているものであることから、それらを積極的に受け止め、様々な表現の仕方や感性を豊かにする経験となるようにすること。</p> |
|---|

この時期の子どもは、自分の経験の中で触れた事物を手がかりに様々なイメージを膨らませていくので、一人一人の子どもの現在の興味、関心を理解して、環境を構成することが重要になる。また、子どもは、豊かな環境に触れ、心揺さぶられる経験を重ねると、それを表現せずにはいられなくなる。

例えば、普段よく散歩に出かける近くの公園の桜は、いつも同じ場所  
にあって、季節の移ろいととともに葉のない木、花が咲き乱れ散る木、若  
葉の木、色付く木、葉を落とす木と様々に変化する。そこで、子どもは  
花びらを追いかけ、どこからくるのかを探して、見上げた空の青さに気  
が付く。夏には、そよ風に揺れる葉の隙間から漏れる光の環を追いかけ  
ることに夢中になる。葉の散る頃は、「葉っぱの雪だー」と思わず声を  
あげたりする。落ち葉の上に寝転んで、カサコソという音を聞き、枯れ  
た葉のにおいを嗅いで秋を感じる。これらの子どもの活動を保育士等は  
一緒に経験しながら、自身の心の内側から出てくる言葉を発する。子ど  
もは無意識のうちに、その場面における自らの心の動きと保育士等の発  
する言葉を結び付けていく。こうした経験は、やがて言葉、体、音、絵  
といった様々な手段で豊かに表現する土台となる。

② 子どもが試行錯誤しながら様々な表現を楽しむことや、自分の力  
でやり遂げる充実感などに気付くよう、温かく見守るとともに、適  
切に援助を行うようにすること。

この時期は、目の前にないものをイメージすることが可能になってく  
る時期である。日常的に経験していることであれば、「こうやればこう  
なる」というように、少し先を見通すこともできるようになってくる。

例えば、いつも遊んでいるブロックを自分も他の子がしているように  
つなげたいと試みるが、うまくいかない。それでも、飽きずにつなげよ  
うと試みているうちに、ブロックの引っ込んでいるところと、でっぱり  
のあるところを見付けて、そこにはめこもうとする。しかし、指先が思  
うように動かず、また何回も試みる。偶然にもブロックがつながると、  
次も同じように試行錯誤する。今度はすぐに引っ込みとでっぱりを見付  
け、うまくはまると、ようやく、引っ込みとでっぴりの関係が分かり、

保育士等のところへつなげたものを得意げに見せに来る。保育士等の「ぴったりはまったね。よかったね。」とこれまでの過程や子どもの喜びを認め、受け止める言葉に、子どもは更に意欲を得て、またブロックをつなぎ続ける。

子どもが自らの興味や関心に基づいて、自分の力で取り組み、表現しようとする過程に対する見守りと適切な援助が、子どもの充実感につながり、試行錯誤を重ねて自分なりに表現したり、物事を探求しやり遂げたりすることへの意欲を培っていく。

③ 様々な感情の表現等を通じて、子どもが自分の感情や気持ちに気付くようになる時期であることに鑑み、受容的な関わりの中で自信をもって表現をすることや、諦めずに続けた後の達成感等を感じられるような経験が蓄積されるようにすること。

この時期は、何でも自分でやってみようとするが、まだそれを実現する力が十分には追いつかないことが多い。

例えば、衣服を着替える時にボタンをはめようとする場面で、ボタンホールにボタンを入れるという動作のイメージはできるので、見えるところにあるボタンは、何回か失敗を繰り返しながらもはめていく。意識を集中して取り組むので、1個はめるたびに思うようにできた安心からため息をつく。次のボタンに、息を詰めるようにして再び意識を集中し、とりかかる。しかし、見えないところにあるボタンは、何回試してもうまくホールにはまらない。できるはずと思っているので、保育士等の援助の手を払いのけるが、やはりどうしてもはめることができずに、「こんなはずじゃない」とかんしゃくを起こしてしまう。そこで、保育士等に「頑張ったね。もう少しだったね。」と集中しながら何度も挑戦した過程の姿や思いを受け止められ、慰めてもらうことで、次の日もボタン

はめに取り組む意欲を持続させる。そして、全部自分ではめられるようになる、「できた」と満足して嬉しそうに保育士等に告げるようになる。

保育士等は、こうした生活や遊びの中で子どもが様々なことに取り組む様子を、思いや願いの表現された姿として捉え、そこで子どもが味わう悔しさや戸惑い、嬉しさや誇らしさを丁寧に受け止め、思いに沿った言葉をかけながら、意欲を支えていくことが求められる。

④ 身近な自然や身の回りの事物に関わる中で、発見や心が動く経験が得られるよう、諸感覚を働かせることを楽しむ遊びや素材を用意するなど保育の環境を整えること。

安心できる保育士等の存在が感じられる環境で、落ち着いて遊び込める比較的小さな空間に、子ども一人一人の興味、関心や発達過程に応じた遊具が、子どもから見えるように、そして手に取れるように用意されている。また、テラスや園庭には、季節の変化を感じられるような草花が植えられていたり、年上の子どもたちが世話をする小動物が飼われていたりする。こうした環境に触発されるようにして、子どもは様々な感覚を働かせながら周囲のものに関わり、そこで発見したことや心を動かされるような出来事を保育士等に告げ、共感や励ましを得て、更に好奇心や感性を豊かにしていく。

水などのように、ある程度子どもの思うように自由に変化させることができ、時に想像を超えた動きをする物質は、子どもにとって思わぬ発見をもたらす遊びの素材である。例えば、水道で水を流して、そこに手を伸ばすと、手の位置で水のはね方が変化する。その水が、土を濡らして模様ができると、そこから連想して保育士等と一緒に様々な物語をつくっていく。また、光の当たり方で小さな虹ができたりすることを発見

し、その美しさに見とれたり、友達に知らせたりする。

保育士等は、子どもがいろいろな方法で主体的に関わり、その変化や手応えを楽しめるような保育の環境を用意することが望ましい。また、子どもがじっくりともものに関わり、様々な気づきや発見の喜びを経験するためには、時間がしっかりと確保されていることも重要である。保育所や保育室の全体的な環境の構成や、一日の流れを見通した生活や遊びの時間のとり方に配慮することが求められる。



### (3) 保育の実施に関わる配慮事項

ア 特に感染症にかかりやすい時期であるので、体の状態、機嫌、食欲などの日常の状態の観察を十分に行うとともに、適切な判断に基づく保健的な対応を心がけること。

この時期の子どもの保育では、不機嫌な状態や食欲不振、急な発熱や嘔吐<sup>おう</sup>など、わずかな体調の変化に注意を払い、感染症の早期発見に努めなければならない。普段と比べ、過度に水分を欲しがり、だるそうに生あくびが出る場合は、注意が必要である。症状により必要があれば他の子どもから離し、嘱託医や看護師等の指導の下で、保護者と連携をとりながら対応策を考える必要がある。

保育士等は、普段から、室内の気温や湿度及び換気に注意を払い、手洗いや消毒等、衛生面にも十分に注意を払わなければならない。また、感染症に関する知識を習得し、流行状態を把握しておくことも大切である。

イ 探索活動が十分できるように、事故防止に努めながら活動しやすい環境を整え、全身を使う遊びなど様々な遊びを取り入れること。

歩行の開始に伴い子どもの行動範囲が広がり、探索活動が活発になる。また、大人にとって思いがけない行動をとることも多くなる。そのため、保育士等は、子どもの活動の状態、子ども相互の関わりなどに十分注意を払い、事故防止に努めなければならない。

子どもの手が届く範囲の物はその安全性などを点検し、危険な物は取り除き、安全な環境を確保するとともに、歩行や遊びの障害にならないようにしていく必要がある。また、十分に全身を動かして活動できるよ

う、子どもの興味、関心に沿った遊具の置き場所や、空間の構成とそこにいる保育士等や子どもの人数、子どもの生活や遊びの流れなどを発達に即して考えるとともに、子どもの動きやすい服装を保護者に準備してもらうことも大切である。

**ウ 自我が形成され、子どもが自分の感情や気持ちに気付くようになる重要な時期であることに鑑み、情緒の安定を図りながら、子どもの自発的な活動を尊重するとともに促していくこと。**

自我が育ってきて、自己主張をする場面が多くなってくるが、思い通りにいかなかったり、言葉で十分に自分の気持ちを相手に伝えることが難しいことも多く、思わず手が出てしまったり、泣いてしまったりすることがある。子どもにとって、保育所が安心して自分の気持ちを表すことができる場であることは重要である。保育士等は子どもの気持ちを十分に受け止め、触れ合いや語りかけを多くし、情緒の安定を図ることが必要である。そして、子どもが適切な方法で自己主張することができるように、その主体性を尊重しつつ、言葉を補いながら対応する。

子どもは気持ちが安定すると、好奇心が高まり、新たに気付いたことや、自分でできたことを保育士等に伝えたりする。このような子どもの姿を十分に認め、共感していくことが、子どもの自発的な活動を支えることになる。子どもが安心感、安定感を得て、身近な環境に自ら働きかけ、好きな遊びに熱中し、やりたいことを繰り返し行うことは、主体的に生きていく上での基盤となるものでもある。

**エ 担当の保育士が替わる場合には、子どものそれまでの経験や発達過程に留意し、職員間で協力して対応すること。**

新しい年度を迎えるなどして担当の保育士が替わる場合には、子どもが不安にならないよう、職員間で子ども一人一人のそれまでの経験や発達の状態などに関する情報を共有し、関わり方が大きく変わらないように注意することが大切である。発達の過程における個人差が大きな時期であることから、特に配慮を必要とする点やその対応等については、適切に伝わるよう十分に話し合うことが必要である。また、担当が替わることを保護者にも伝え、保育所と家庭が互いの情報を交換することで、保護者の不安にも配慮することが大切である。

子どもが、それまでの保育を通して育ってきた自我や人への信頼感などを基盤に、人と関わる力を発揮しながら、新しい担当の保育士との関係を築くことができるよう、全職員で配慮することが大切である。